
スイム魂

大樹の心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイム魂

【Nコード】

N7853X

【作者名】

大樹の心

【あらすじ】

あるスポーツクラブで中高生8人の水泳選手を教える事になった、熱血水泳コーチ。そのスポーツクラブに起こる数々のトラブル。そんな問題を一つ一つ解決して『熱い気持ち』で心を掴み目標を目指していく。ストレートでわかりやすく、感動できる話です。

スイミングとフィットネス

立ち並ぶビルやマンション。駅から程近いその場所は、住宅街でもオフィス街でもない中立な位置づけ。生活的環境も整っているが、働く男女も行き来する・・・そんな場所だ。そこに、一際目立つた存在感と大きさを聳え立つ白い建物がある。

『フィットネスクラブ』

プール・ジム・スタジオなど、ただの娯楽ではない健康や美を提供する大型スポーツクラブだ。もちろん、無料で開放された施設ではなく会員制の有料施設。そんな有料施設に通う人達は、夜なら仕事帰りの会社員やOL、昼間なら美に気を配り続ける主婦層がほとんどだ。

そんな立派な清潔感ある施設の前に、大きなバックを持った1人の大柄な男性が仁王立ちをしていた。

男「・・・・・・ここが、これから俺が働くプールか・・・・」

その笑顔からは、健康を提供する爽やかさとは違った、ちょっと暑苦しい情熱を感じる。

歳は30代前半、スポーツジャージに身を包んだ見た目から、熱血体育教師を思わせる。男性はそのまま意気揚々と、まっすぐにその施設内へと足を運んだ。

晴人「こんにちは！！今日からここで働かせて頂く事になりました、
ミスモトハレト
水元晴人です！！宜しくお願いします！！」

元気が良すぎて少し怖さを感じてしまうほどの気持ちが入った熱い挨拶。そんな場違いな熱血を男性から感じとったのか、受付の女性は、戸惑い焦りながら答えた。

受付女性「あっ！は．．．はい。こちらが、スタッフルームになります．．．」

案内されたスタッフルーム。中まで付き添ってくれた受付女性が、1人のスーツ姿で細身の年配男性に目を向けた。

受付女性「店長。今日からこちらに配属になると言っていた新人の方が見えています。」

仕事中で忙しいスタッフルーム、みんなそれぞれの事務仕事に手をつけている。施設の外観やジム・スタジオなどの落ち着いた爽やかさとは違い、このスタッフルームには間違いないサラリーマンとしての忙しい『仕事』が広がっていた。そんな仕事の手を一瞬止めると、その店長が面倒くさそうな顔で受付女性に指示をした。

店長「あっ．．．ああ．．．彼ね．．．とりあえずあつちに座ってもらって！」

言われた受付女性に案内されたスタッフルームの奥。その応接室のような座椅子に晴人が座ると、待たされる事数分、すぐにその店長がやってきた。

店長「おーおー君ですか．．．今日から宜しく願いますね．．．」

小休憩のついでに話をするかのような口調の店長。その店長がゆつくり目の前の座椅子に座ろうとした。しかし晴人は、店長が座るよりも早く、機敏な起立をすると大きな声をスタッフルームに響かせた。

晴人「こんにちはヘッドコーチ！今日から宜しくお願いします！！特技は水泳！！とある小さなスイミングクラブで小さい頃から水泳をずっと続けてきました。高校の頃には水泳の日本選手権にも出場した経験があります！！水泳指導経験はまったくありませんが、一生懸命に競泳選手指導をさせていただきます！！今日から色々お世話になります！！」

それを聞いた店長は、熱血漢丸出しのその態度に一瞬驚き、引きつった顔を作った。

店長「ちよっ……ちよつとまーまー落ち着いて座って……とにかく今日から一緒に働く仲間ですから、宜しく願いしますよ……ははっ……はっ……」

中腰の店長が晴人をゆっくり座らせると、喋り足りない晴人が座椅子に座りかけながら言った。

晴人「あつ、今日からこのクラブに在籍している中高生の選手コースの指導をさせて頂けると聞いています！！自分は泳ぐ事は出来ませんが、指導経験はまったくないので、ヘッドコーチのお手伝的な形でやる事になるのでしょうか？色々勉強させて頂きます！！！！」

晴人が言う、選手コース。それは、一般的な1週間に1回や2回といった習い事をする水泳スクールとは違い、毎日プールに通い続け、

将来はオリンピックや日本選手権など大きな大会に出場する事を目標とする競泳選手を集めたコースだ。その選手コースは特別で、指導方法も練習内容も深く難しい。その指導方法を店長から教われると思った晴人の、熱い魂のこもった挨拶だった。

店長「ちょ．．．ちょつと待ってくれ君。焦りすぎないで。ゆっくり説明させてもらうから．．．．」

とにかく気が早く、自分の伝えたいその事だけを次から次へと口走る晴人に少し動揺をする店長。その晴人のペースを崩し、自分のペーシングに持つていくように店長がゆつくりと話し始めた。

店長「はい．．．まず．．．選手コースですが．．．．選
手の方は君一人でやってもらいます。」

『よし！！一つ一つ教えてやるから、しっかり俺についてこいよ！』そんな店長の熱い一言を期待していた晴人は、自分の想像とはまったく違うあっさりした一言に焦り驚いた。

晴人「え！！؟؟自分一人ですか???いやっ．．．．まったく水泳指導経験ないんですよ?．．．しかも、ヘッドコーチを差し置いて自分がトップの選手を教えるなんて．．．．」

それを聞いた店長は、王様のように背もたれに身体をゆだね、足を組んだデカイ態度を見せる。

店長「いやいやいいのいいの。選手の指導なんかは適当にやるときやいいからさ．．．．とにかく、他の仕事を頑張ってくればいいの！あっ後、私はヘッドコーチじゃなくて、店長ですから、店長！ヘッドコーチなんて言い方はもう古い！ここは子供だけが通

うような古いスイミングクラブじゃなくて、大人が通う最新のフィットネスクラブだからね！」

目を開き、口も半開き・・・あまりにも想像と違う店長の態度を目の前に、晴人は言葉を失いあつけにとられた。それでも大げさに首を横に振り、我に返るように自分の目的と、この仕事を選んだ理由を真剣な眼差しで語りだした。

晴人「自分は競泳選手を教える為にここへ来たんです！自分が経験してきた競泳と言う世界・・・日々仲間と戦い競い合って・・・時には泣いて、時には笑って！そんな熱い気持ちを持った水泳選手達の指導をする目的で、この社員になったんですよ！！それなのにその競泳を適当にやれっ！??・・・適当になんか、出来るわけないじゃないですか！！！」

これから上司になる人へのきつめな言い方。それでも、店長の言葉に納得いかない晴人は、『自分は間違っていない！』というまっすぐな目で言い放った。

・・・ドン！！！！

一瞬の沈黙を終えた店長は、目の前のテーブルを強く叩き立ち上がった。

店長「いい加減にしてくれないか君！！ちょっとこっちに来なさい！！！」

晴人「あっ・・・ああ・・・え??はっ・・・はい!。。。」

晴人の腕を掴み、強引気味にスタッフルームからお客さんのいるジ

ムへと連れ向かう店長。

さっきまで温厚そうに見えた店長がいきり立ってテーブルを叩くその姿に驚いた晴人は、言われるがままに身体を店長に預け、絡まりそうな足で引つ張られていった。

店長「見なさい！！うちの施設を！！」

そのジムを見ると、そこには数多い大人の男性や女性が、ダイエットや健康・運動を目的に身体を動かす姿があった。

店長「大人の会員が3000人！子供は500人！うちの施設はね・
・子供主体じゃないんだよ！！大人中心！！下に見えるプールエリアも見て見なさい！！」

そう言いながら店長が指差すのは、斜めに下にあるプールが見える大きなぞき窓。晴人はゆっくりそこからプールを覗き込んだ。

店長「1日のほとんどの時間、大人がプールを使っているんだ！！
今はこの業界はこれが当たり前！！競泳なんて儲からない仕事、お金にならないんだよ！！！！水泳に熱い指導をするコーチなんてここには必要ない！！それがわかるまでここで、この施設をじっくり見ていなさい！！」

小さい頃からずっとスイミングクラブで続けてきた水泳。晴人が教わってきたその指導者達は、熱意があって水泳熱心な人ばかりだった。そんな指導者である『コーチ』に憧れ、この道を選んだ晴人。それでもこのフィットネスクラブには、そんな水泳指導に熱くなる者は誰もいなかった。むしろ、そんな競泳を馬鹿にしてけなす態度をとる上司。あまりにもひどい落差ある現実だ。

期待に胸いっぱいだった晴人は、その落差ある現実を目の当たりにして、言葉なくそこに立ちすくむ事しか出来なかった。

潰したい選手コース

ショックを受けた晴人は、肩を落とし力なくスタッフルームに戻った。

店長「あつ水元君、戻ったか・・・君の席はそこ！！隣にいる女性スタッフが君の世話役だ！仕事内容を教えるように言っているから、しっかり聞いて仕事をどんどん覚えてくれよ！」

言われた席に近づくと、何かに上から押さえつけられたかのように『ガクツ・・・』と席に座りこんだ。力なく座っていると、隣の女性が笑顔で肩を叩きしゃべりかけてきた。

女性「こんにちは！！新人の水元さんですよ？？私は、今年の4月に入社した森下彩香モリシタサヤカって言います。宜しく願いします。」

彼女が、さっき店長が言っていた世話役の女性。

長い髪は深い茶色、細身でスラッとしたスタイル。見た目や喋り方で軽そうに見えてしまうが、実際はそれとは違う活発さと元氣が目立つ20代前半の女性だ。

簡単な挨拶を終えた彩香が、すぐに晴人の耳元に口を近づけヒソヒソ話を始める。

彩香「あつ・・・さっき店長と揉めてましたよね・・・ダメですよ店長と争ったら・・・あの人、仕事命の堅物ですから・・・何言っても納得しませんよ。」

それを聞いても『あつ・・・はい・・・』と力ない小声でしか返事を返せない晴人。そんな元氣のない晴人など気にせず、彩香はど

んどん話を先に進めていく。

彩香「・・・しかも、言い争ってた内容って選手の事でしたよね??店長の前で競泳の話は絶対にダメ!!あの人、水泳選手が一番大っ嫌いなんですから。売り上げにもならないでプールのコースばかり使う選手コースを、いつか潰してやろうと思っていらっしゃるんですよ。」

晴人がこの仕事を選んだ理由、それは選手コースの指導がしたいから。それを潰すというその内容には肩を落とした晴人も、さすがにしっかりと反応をした。怒りのこもった睨む顔で彩香を見つめる。

彩香「そ・・・そんな顔で見ないで下さいよ・・・とにかく、このままここで社員としてやっていきたいんなら、選手コースにはあまり熱くならず、営業や売り上げにどんどん貢献していった方がいいですよ!!それに・・・」

店長への不信感が募り始めた晴人。そんな晴人に、彩香はまた大きな悩みを抱えさせる一言を続けて言った。

彩香「それに・・・うちの選手達はまったくやる気のないどころし、ようもない選手ばかりですしね!」

そこまで言うとうずから顔を離し、わざとらしくも見える大きめな声で晴人への説明をアピールした。

彩香「じゃっ!!仕事内容を説明しまーす。晴人さんにやってもらうのは、まず、機械室の薬品類の管理と・・・大人向けイベントのポスター作りと・・・」

そんな説明などもう頭には入らない。ただただ『店長への不信感』への苛立ちと『やる気のない選手達』に対する不安で頭がいっぱいになっていた。

態度の悪い選手達

時間は18時30分。この時間から2時間の20時30分までが選手指導の時間だ。『やる気のない選手』と言っていたその言葉、ついにその選手達との初対面を迎える。

晴人はこの日のために用意しておいた自分が選手だった頃の日本選手権のポロシャツを手に取った。JAPANと胸元に書いてある思いの出のポロシャツ、それに着替えると、空気を大きく吸い込み、ため息混じりにその息を吐き出した。そして、もう一度その全ての不一致を振り払うように『よし!!』と言う独り言で気合いを入れ直した。

スタッフルームから一直線に伸びる階段。その階段を下りるとそのままプールサイドに行く事ができる。腕を振りながら気合いたつぷりの晴人がその階段を駆け下りていくと、すぐにその晴人を呼びとめ引き戻す声が……

店長「おい!!水元君!!……ちよつとこつちに来なさい!!」

晴人「???なつ……なんですか!!ヘッドコーチ……いや違った、店長!!!今から選手と初対面の大事な時なんですから!!」

しぶしぶといった感じで戻る晴人を見ると、すぐに店長が雷のように怒鳴り散らした。

店長「何ですかじゃないだろ!!!なんだその格好は!!!お客さんの前はうちのユニフォームを着ていないと行かせないぞ!!!何がJAPANだよ!!!そんなポロシャツは捨ててしまいなさい!!!いつまでも自分の過去に縛られてるんじゃないよ!!!それともう一つ・

・・・今日来る時もジャージ姿だったが、うちの会社はスーツ出勤だからな！！コーチではなく会社員らしく、明日からはスーツで出勤するように！！」

晴人のお尻を強く叩き、イヤミつたらしくにやりと笑う。

そんな態度にまたしてもイラつきムカつく晴人。それでも今はそんな事で揉めている暇はない、営業ユニフォームに着替えて仕切り直しの初対面。堂々とした歩き方で選手達の前に歩いていった。

その姿をプール上なのぞき窓から見つめる男性スタッフ。その横には、プールサイドから戻ってきた店長の姿もあった。2人は企みある見下した顔で晴人を見つめた。

男性スタッフ「どーですかねえ彼、長く続きますかね・・・この仕事。」

そう話すのは、男性スタッフの木島 キジマタケヒサ 武久。彼は、出世を狙って店長に入り浸りをしている、ずる賢いインストラクターだ。全てが店長に忠実で、仕事も出来るかなりのエリート。そんな彼も、もちろん店長と同じく『選手コースを潰す』という思惑を抱いている一人。

店長「・・・あれじゃあ無理だろうな。もって1ヶ月・・・彼が求めている世界と、ここの世界はまったく違うからな。」

木島「早く彼の役目を果たして、やめてくれればいいんですけどね・・・」

店長「・・・そうだな。『選手コースが潰れる』という理想の結末と一緒にな。」

二人の悪巧みをするその姿は、江戸時代の『おぬしも悪よのう・・・』
『そんな空気を作り上げていた。』

実は、晴人を新人社員として選んだのには理由があった。『熱すぎるコーチ』と『やる気のない選手』。その不釣り合いから大きな揉め事を起こし、共倒れのような結末にさせようとしているのだ。

店長「さあ・・・水元晴人君。お手並み拝見ですよ。」

プールサイドでは晴人が選手の前に堂々と立ち、今まさにその挨拶をしようとしていた。

晴人が担当する選手達は全部で8人。男子高校生4人と女子中学生4人だ。晴人は、水着に着替えて準備万全な8人を目の前に、その緊張の第一声を口にした。

晴人「はじめまして。今日から君達を指導する事になった新しいコーチ、水元晴人だ！よろしく。自分も小さい頃から競泳をやっている、高校時代は日本選手権に出場した経験がある！正直、指導経験はまだないが、自分が選手だった頃の経験を活かして君たちに水泳を教えていきたいと思っている。まず最初にみんなに聞きたいのが・・・」

話し途中の晴人が、ふと目線を女子選手達のほうに変えて見る。女子選手達は晴人の話のなどまったく聞かずに泳ぐ準備を始め、その準備を終えると、なんと晴人を無視して勝手にプールの中に入ってしまった。あまりに不謹慎なその行動。晴人はそんな選手達を、コ―チらしく少し上から目線の強めな言い方で怒鳴る。

晴人「おっ・・・おいちょっと待て！！まだコーチが話をしている途中だろ！！何勝手にプールに入ってるんだ！！！」

拓也「あっ・・・駄目ですよ。彼女らいつも自分達で練習メニュー作って勝手に練習してますから。」

そう言ったのは男子選手の一人、拓也^{タクヤ}。真面目そうな外見をした少し小柄な体格の高校2年生だ。それを聞くとすぐにまた別の男子選手が晴人に冷たく言った。

翼「それから自分達も自主練させてもらいますから。それと、2時間練習はきついんで1時間半で帰ります。」

感情表現がない無表情のまま、淡々と平坦な口調で喋る彼の名前は^{ツバサ}翼。身長が一番大きい高校2年生。勝手に自分達の練習時間まで変えてしまった。

挨拶なしで勝手に自分達の練習を始めてしまう女子選手。やる気もまともにも感じない男子選手。完全にコーチを無視した自由気ままな行動と言動・・・『うちの選手はまったくやる気のないでしょうもない選手ばかり』という彩香の言葉が晴人の頭をよぎった。

晴人「ふざけるな！！！！！」

晴人は、持っていた名簿や資料、そしてこの日の為に作り上げた練習メニューをプールサイドに叩きつけ撒き散らしながら叫んだ。

その行動は、ここまであまりにも自分の理想と違いすぎた職場の環境、それに対する八つ当たりのようにも感じた。

感情的になってしまった晴人は、その隠しきれない自分の気持ちを

選手達に熱くストレートにぶつけた。

晴人「俺はお前達を教えにここに来たんだ！！選手の指導をする為にこの仕事を選んだんだよ！！それなのに選手達にそんな態度されたら・・・俺はどうしたらいいんだ！？俺は、お前らを速くさせたい！！頼むから真剣に話を聞いてくれ！！」

全てを吐き出すような心の叫び。晴人の姿が少し可愛そうに見えてしまうほど、その言葉にはまっすぐな感情がしっかりと込められていた。

一瞬の沈黙・・・・・・・・さっきまで冷然と自分達で練習準備を進めていた選手達も、その動きを止め、それぞれがそれぞれに何かを思い悩む表情をした。

沙羅「・・・・・・・・信用・・・・・・・・出来ないんですよ・・・・・・・・」

沈黙を破ったのは女子選手の一人、沙羅^{サラ}。その発言で、みんなの注目を集める。

沙羅「今まで、いろんなコーチが私達を教えてきました・・・・それでもみんな、結局信用できないんです！！やる気もなくて・・・・水泳の事も全然分かっていなくて・・・・」

沙羅が話を途切れさせたのを見て、そのすぐ横にいた別の女子選手、美月^{ミツキ}が続けて口を開いた。

美月「私達はもう中学生です！男子だって高校生。小学生じゃないんだから見ればすぐに分かります。やる気があるのか・・・本当に

水泳の事わかって教えているのか．．．．．コーチを見ればすぐに分かるんです！！」

拓也「みんな．．．．．水泳やコーチが嫌いなわけじゃないんだ。不良みたいなのに、曲がつている訳でもない。ただただ．．．もうコーチに騙されるのには、うんざりなんです。」

翼「ころころころころコーチが変わって、やり方も変わって、結局みんな何もわかっていなくて．．．．．もうそんなのがうんざりなんですよ．．．．．」

次から次へと溜まっていた不満を口にする選手達。その言葉には、それまでの行動が反抗的とはまた別で、理由あるものなのだという気持ちがいっかりと込められていた。『やる気がない』のではなくて『信用ができない』。その違いが言葉の中に込められていたのだ。

またしても沈黙、いやな空気が流れる。その様子を天窓から見下ろす店長が、小声で呟いた。

店長「さあ．．．．．どう対応しますか．．．．．水元君．．．．．」

晴人「．．．．．ふう．．．．．」

肩の力が抜けるようなため息をつく、晴人は落ち着きを取り戻しながら、叩き付けた資料をゆっくりと拾い集め始めた。それを拾い終わると、じつくりとその多すぎる資料に目を通す。

晴人「君が山田 翼か。高校2年生．．．．．平成6年4月25日生まれだな。種目は背泳ぎ。11月23日．．．．．100m背泳ぎが59秒54。12月17日の50m背泳ぎが28秒9．．．．．」

翼「……何ですか？それ……………」

晴人「その隣が……鈴木 拓也、高校2年生。平成6年9月3日生まれ。種目は自由形だな。11月23日の50m自由形が25秒97。12月17日の100m自由形が56秒84……………」

そこまで読み上げるとその多すぎる資料から目線を外し、選手達をまたしっかりと見つめ直した。

晴人「それだけじゃないぞ。調べられる限りの全員の細かい資料がここにはある。小学校の頃からの大会タイムから練習タイム。今までの練習時間と泳いだ距離、更には身長体重。お前らが選手コースに入ってから全てのデータだ。」

拓也「……………全部？？そんなに調べるのって……………どれだけ時間かかるんだ……………」

選手達の信用していなかったコーチに対する視線。一瞬だが、その視線が驚きと少しの期待の視線へと変わった。

晴人「もう一度言わせてくれ……俺はお前達を教えにここに来た！！選手の指導をする為にこの仕事を選んだんだ！！今までお前達が教わってきた気持ちの無いコーチ達とはわけが違う！！俺は本気で君らを速くさせたいんだよ！！！」

沙羅「もういいよ！みんな早く練習しよう！！もう騙されない！！私達……………そう決めたでしょ？？」

不信任から信頼……………一瞬だけ変化を見せた選手達の気持ち。そ

れでもその気持ちをまた、『正当化』に戻るかのような沙羅の叫びだった。

何が正しい『正当化』なのか・・・まだ若い彼女達にはそんな答えはすぐに出せない。そんな彼女達は、今まで通りの『不快感』を頼りにそれを『正当化』に戻していた。

自分達で作った練習メニューで泳ぎ始める女子選手達、それを見た男子選手達も我に返るようにその横で『さく」とつ・・・』といったおもむきで泳ぐ準備を始める。

結局変えることが出来なった選手達の心。それでもその中の一人、拓也は一瞬また晴人のほうに目をむけて心迷わす表情を作った。

翼「おい！拓也！アップ始めるぞ！！」

その声に拓也が気づき見ると、他の選手達は皆もうすでにキャップにゴーグルをつけて、泳ぐ準備万端の状態。

拓也「あつ・・・ああ・・・今行くよ・・・」

拓也は口ごもりながらあわてて答えた。

そんなやり取りを、相変わらず天窓から観賞している悪巧みの2人。

木島「結局彼もこんなもんですね。このまま行けば・・・やっと選手コースを潰せる・・・」

思惑通り・・・そんな事を思う木島。その横では、店長が気迷いするような目でプールを見つめていた。

店長「・・・・・・・・何かが違う気がする・・・・・・・・今までのコ

「チとは何か違う癖がある……もしかしたらあいつ……
本当に選手コースをまとめてしまいそうな……」

木島「何を言っているんですか店長!! そんな事になったら今より
営業に支障をきたしますよ!!! そんな事、あつてはならないです
!!!」

それを聞いた店長が怒りにも感じる悪巧みの顔でプールサイドを睨
む。

店長「そんな事……させませんよ、絶対に!!」

その表情には、何があっても選手コースを潰すという曲げられない
感情が込められていた。

選手コースを潰すという曲げられない熱意が感じられた。

すれ違いの繰り返し

数日後のプールサイド……………

晴人「よし！今日も練習メニューを作っておいたぞ！！さあ夏の大会を目指して……………頑張っていくか！！」

練習時間に集まった選手達の前に立ち、わざとらしく明るく元気に言う晴人。

沙羅「なんでわざわざ毎日練習メニューを作るんですか？？言っただけじゃないですか！自分達で練習メニューも作るし、自分達で練習するからコーチは必要ありませんって！！」

女子選手の中でも、一番気が強くまじめな沙羅、中学3年生だ。女子チームではリーダー的な存在で一番意志も強い。一度決めたら曲げられないその性格が一言一言のきつさからも感じられた。そんな彼女だからこそ、水泳に対しては真面目で本気、ストレートな熱意を誰よりも持っていた。

晴人「いいか……………俺は君達が俺を認めてくれるまで、毎日練習メニューを作り続ける！！練習中の2時間、どんなに俺を無視しようが邪魔と思われようが、俺はプールサイドに立ち続ける！！これが君達に見せられる、俺の本気を伝える唯一の誠意だ！！」

熱く語る晴人。それでも相変わらず、そんな熱意の伝わらない沙羅は……………

沙羅「あっそ……………勝手にやってればいいじゃないですか！！」

と、冷たい一言であしらう。

こんなやり取りを、もう何日も続けている。いつまでたっても心を開いてくれない選手達。結局この日も、いつも通りの挨拶なしでみんな勝手に泳ぎ始めてしまった。

選手達の為に何もする事が出来ない晴人は、ただただそこに立ち選手達の泳ぎを見続けた。そんな晴人をスタッフルームからプールサイドにやってきた木島が、鼻につくむかつく態度で呼び寄せる。

木島「おい水元！ちよつと話があるからスタッフルームに来てくれないか??」

晴人「何ですか??木島さん！今指導中ですよ・・・」

木島「何が指導だよ！あいつら勝手に練習してるんだろ!?とにかく早くスタッフルームに来い！」

先輩肌というか上司っぽくというか、そんな上から目線を利用した強引な言い方。確かに上司で目上の人ではあるので、晴人は仕方なくといった表情を見せながらスタッフルームに上がっていった。

店長「いつまでこんな事を続けているつもりだ!!」

上がるとすぐに、店長からの怒鳴り叱りが。

晴人はビクツと身体を震わせその驚きを表現すると、廊下で立たされた子供のように、じっと押し黙り肩をすくませた。

木島「店長。ちなみに、このポスターも作れていないし、このチラ

シも準備できていません。ほんっ……とにまったく何も手をつけていない状態です。」

木島が言うのは、晴人が担当している事務仕事の事。見るとそこには、何も手がついていない残された仕事如山積みになっていた。

店長「自分の仕事全てほったらかしにして、選手の練習メニューを作るのに1時間。選手の指導に丸々2時間。合計3時間も選手の事だけをやって……拳句の果てに、選手はその練習メニューには手をつけず、自分達で勝手に練習をやっているだど??まったく無駄な時間を3時間も費やしているって事なんだぞ??わかってるのか!?水元!」

晴人の手には、その無駄と言われた手書きの練習メニューがしつかりと握りしめられていた。晴人はそれに一瞬目を向けると、熱い眼差しで店長を見る。

晴人「すみません店長……だけど自分は……」

店長「言い訳はやる事やってから言ってくれないか!?!」

店長は終わっていない仕事である山積みの紙を、晴人の前に撒き散らした。こうなってしまうてはもう何も言い返せない。仕方なく晴人はその資料を拾い集め、プールサイドには戻らずその仕事に手をつけ始めた。

ひと段落をして急いでプールサイドに戻ると、練習を終えた選手達はもうプールを上がり、すでに片付けを始めている最中だった。

晴人「ごめんごめん!?!どうしても外せない仕事があつて……ス

タツフルームに戻っていたよ……。」

「沙羅「何がごめんごめんですか??誰もコーチの事なんか待っていないませんでしたよ。男子達はもう帰ったし、私達ももう上がる所です。」

晴人「ああ……そうか……。」

そんな事は分かってはいたが、あまりにもそっけない沙羅からの一言に、晴人が返す返事は小さく弱弱しかった。

舞「どこが誠意だよ……結局……なんだかんだ言っても練習なんて見る気がないんですね!」

追い討ちをかけるような冷たい一言を言ったのは、女子選手の中でも最年少、中学1年生の舞だ。

晴人「いやっ……待ってくれよ……今日はほんと仕方がなくて……。」

華「コーチが言い訳をするんですか??情けないですよ。」

そう言ったのは舞とは実の姉妹である、姉の華。中学2年生だ。

美月「何を言っても正直私達……コーチの事は信用しませんから。さっ行こうっ。」

心に突き刺さる言葉ばかりを、ズキズキ言いまくる女子選手達。

役立たずで無力な自分……仕事は出来ずに怒られるし、選手の練習も見られず信頼を失う。

片付けを終え更衣室に去る4人の後ろ姿を見ながら、晴人はそんな情けない自分の存在を痛く感じさせられた。

つながり始める心、離れる心

夜も遅くなり始めた頃、やっと溜まっていた仕事も一通り終わった晴人が、帰り支度を済ませてスーツ姿で職場を後にした。

外に出ると、そこに学生服を着た高校生が1人。

晴人「・・・・・・？？拓也・・・・・・」

そこに立っていたのは、男子選手の中でも一番水泳を真面目に努力し続ける拓也。何か言いたそうな、うつむき黙る直立で立っていた。

拓也「途中まで・・・・・・いいですか？」

ためらいながらも、何とか言えたその言葉。そんな拓也を見て晴人はこころよくそれを承諾した。

拓也と歩く駅までの夜道・・・・・・なんだか妙な緊張感とテレがある。歩道の横にある車道をたまに走り去る車が、一瞬だけその空気を变えるようにライトの灯りとエンジン音を撒き散らした。

少し道を進むと、その緊張感をほぐすように晴人が優しい笑顔で拓也に話しかけた。

晴人「なんで・・・・・・俺の事を待っていたんだ??」

明らかに待ち伏せを思わせる拓也の行動。それに対して、ストレートに質問を投げかけた。

拓也「いや……別になんでもないです……ただ……」

晴人「ただ??」

笑顔の表情で心の中に入り込もうとする晴人を見て、拓也は閉ざしていた心を少しずつ開き始めた。

拓也「ただ……コーチはいい人ですよ……」

晴人「??いい人??それはほめられたって事でいいのかな??ありがとう!」

満面の笑みで返事を返す。そんな単純さで喜びを表現する晴人の姿を見て、拓也は更に正直な気持ちをさらけ出した。

拓也「正直言つて……俺はもうコーチを信じてもいいです。」

自分の意見は全て否認されて、仕事に対しても文句も言われ続けて、選手達にもずっと信用してもらえなかった。

そんな晴人が、仕事に就いて初めて聞く事が出来た信頼の一言。

……その一言を聞き、晴人は涙ぐみ素直に嬉しさを表情に見せた。

拓也「だけど……」

一瞬の間をおくと、言いづらそうにその続きを話し始めた。

拓也「だけど……自分一人だけコーチを信じて、コーチの練習をやっても……選手コースの雰囲気は壊れてしまうだけ……」

・・そんなんじゃ、みんな速くなれないし、仲間にもなれないと思う。」

裏切りにもとれるその行動。みんなが右を向いているから右を向かなければならない。それは、みんなに合わせているわけではなく、それがチームだからという事を言いたいのだ。

拓也「みんな絶対にコーチの事は信用しないと思います。特に女子達の場合はすごく堅い。だから、俺から言えるコーチへのアドバイス。それは・・・選手コースは諦めて、他の仕事に集中をして下さい。」

真面目すぎる拓也だからこそ辿り着けたゴールの答えだったのかも知らない。高校生とは思えないほど、他人の事も考えたまっすぐな忠告だった。

晴人「俺は諦めない。何があってもみんなの信頼を勝ち取って、絶対に強く速くさせてみせる！！」

拓也に負けないまっすぐな目で答える。その答えを聞いた拓也は、更に自分の本心を全て吐き出した。

拓也「俺だってもう高校生です。分かっているんですよ・・・ブルの雰囲気。あのブルは選手コースをなくそうとしているんです。だから、選手コースの担当コーチには冷たく当たるし、いろんな仕事を押し付けるんだ・・・そうやって選手コースの練習をさせないようにしてるんだ！！でも・・・俺達はいいんです。選手コースがなくなるのが、潰されようが全然いいんです。けど・・・」

そこまで言うと、拓也はうつむいていた視線を晴人に向けて、握るこぶしを更に強く震え固めさせた。

拓也「夏まではもってほしい！何があっても夏までは選手コースが続いていてほしいんです！だけど……このままコーチが強がっていると、今すぐにも選手コースが潰されちやいそうで……」

熱意を込めれば込めるほど、店長との衝突も激しさを増す。それによる早すぎる選手コースの廃止……待ち伏せしてまで伝えなかったその危険な事態。

それを聞いた晴人は拓也が伝えたいその部分よりも、自分が気がかりな部分だけを質問で返した。

晴人「夏に何があるんだ？もし良かったら教えてくれ！夏の目標を。みんなで力あわせて、その目標を達成させよう！！俺も出来る限りの指導で、手伝ってやるから！！他のスタッフに何言われても俺がやってやるからさ！！」

拓也の意見への反論にもとって取れる、晴人の変わらない安直な態度。拓也はそんな晴人を苛立つように睨んだ。

拓也「それが逆効果だと言ってっているじゃないですか！！なんでわからないんですか？？その熱意で俺達の目標を壊さないで下さい！！」

そこまで聞くと、晴人は今までの笑顔だった顔を、心あるきつめな顔へと変えた。

晴人「無理だよ！！自分達で速くなるなんて無理なんだよ！！水泳

ってそーいうもんだろ??小さい頃から水泳やってきてわかっているだろ??コーチがいなくて、速くなんかなれないんだよ!!」

コーチの存在の大きさ。それは晴人も、自分が水泳選手だった経験から良く分かっていた。

自分の練習で速くなれるほど水泳は甘くはない。コーチがいなければ練習に甘えが出てしまう。かなりの意志がなければ、自分で追い込み成長させる事はできるはずもなかった。

ただの安直ではないというその気持ち、水泳を理解しているその台詞からしっかりと伝わってきた。それに気付いた拓也は、晴人を見る目を歩道に変え、言っている事もわかってはいるが強情な態度を変える事も出来ず苛立ち叫んだ。

拓也「わからないならもういいです!!もしコーチのせいで、選手コースがなくなったら、一生恨みますからね!!!!」

思い乱れる拓也は、そんな捨て台詞を言うと、駅の改札口に向かって走り消えていった。

少しだけ繋がり始めた心が、またすれ違いを始める。そしてついに磁石のN極とS極のようにばらばらになってしまった。お互いに言いたい事も、伝えたい事もしっかりとわかつている。それでも素直に意見を聞く事が出来ない複雑に入り乱れた問題・・・・・・拓也の後姿を見る晴人は、そんなわだかまりある悔しい表情を見せた。

どこにも向けられない怒りの矛先を、身体の中に押し殺す晴人。その身体は激しく震えていた。

俺達の目標

晴人「よし！今日もみっちり2時間！しっかり見届けるぞ！！」

翌日の練習。拓也とのやり取りがあつた後でも、何も変わらず水泳指導やる気満々で選手の前に立つ晴人。それを見た拓也は、晴人に冷たい目を合わせるとすぐに流し目のように目線はずし、練習準備を始めた。

店長「晴人！！！！！！！！」

店長の激怒した声がプールサイドにこだまする。いつもならさつさと泳ぎ始める選手達も思わずその動きを止めてしまった。

店長「この仕事はどうするんだ？？？えー！！！！！！？」

あらぶる店長がプールサイドに投げ落としたそのプリント用紙。それは、またしても手をつけていない晴人の事務仕事だった。

店長「何回言つても、何回教えても一向に直らない！！もう私も我慢の限界だ。これ以上こんな無駄な時間に付き合つて、ただ見るだけの仕事を続けるようなら会社を辞めてもらう！！選手コースも・・・・・・解散だ！！！！！！」

解散の一言に、普段は感情をあまり出さない選手達が一瞬にして目を見開いた。そして、誰よりも拓也が晴人を見ながら『だから言つただろ！！』という怒り目を投げかけた。

店長「さーどーするんだ晴人？答えは簡単だ！！こんな自分勝手に

やる気のないやつらはほっておいて！早くスタッフルームに戻って仕事をしなさい！！！」

その台詞を聞いた晴人が、事もあるつか今度は逆に店長を大声で怒鳴り返した。

晴人「自分勝手にやる気のないやつら？？今すぐ彼らに謝って下さい！！！」

興奮が収まらない晴人は、足を一步前に踏み出し、更に店長へと近づく。

晴人「悪いのはコーチです！！こんな環境にしてしまったコーチがいけないんです！！それなのに選手達をけなすなんて…………今すぐに選手達に謝って下さい！！！」

そこまで言うと、今度は涙ぐみながら選手を思うその気持ちを語り始めた。

晴人「この2時間は無駄な時間じゃないんです！！彼らにとって大切な時間なんです！！大切な時間だからこそ、コーチとしてしっかりと見届けて…………しっかりとそばにいてあげたいんです！！自分は…………この時間だけは絶対にここに居続けます。それが自分の仕事だから…………今、自分が出来る一番の仕事がそれだから、自分はここに何があっても立ち続けます！」

理解できないからぶつかり合う。ただただ自分の事だけを考えていても、相手の本心はわからないものだ。

『選手達が泳ぐこの時間』

それが選手達にとってどれだけ大切な時間なのか……
役に立たなくても見続けてきた選手達の練習……その行動
は、選手達の気持ちを理解している事を形として表していた。

そんな晴人の行動の意味を知った選手達は、晴人が叫び訴える姿を
見て、いつしか心を奪われ始めていた……

しかしそんな選手達の気持ちの変化にも気付かない店長が、とどめ
の様な冷たい一言を言う。

店長「それが……答えでいいんだな??この山積みの仕事には、
手をつけないって事だな??」

ここまで言っても伝わらないその気持ちに悔しそうな表情を浮かべ
ると、晴人は店長をまっすぐ見つめ直した。

晴人「……この鍵を預かせて下さい。毎日、ここに
泊まって、夜のうちに必ず与えられた仕事は片付けます。満足いく
ように手を抜かず、ちゃんとした仕事をします!だから……
・この時間だけは、ここに居させて下さい。」

強情で聞き分けが悪いと言うよりは、自分が正しいと信じているそ
の目。自分の時間を削ってでも選手の時間を大切にしたいという晴
人のうそのない本心だ。

2人はしばらく黙り見つめあった。

店長「一つでも仕事に不備があったら……すぐに選手コースを
降りてもらふ。そして、選手コースも解散だ。約束できるな?」

晴人「はい！ありがとうございます！」

嬉しそうに頭を下げる晴人。店長はその姿を見ると、齒軋りをさせた怒りの表情で悔しそうにスタッフルームへと帰っていった。店長が居なくなるのを見ると下げた頭をすぐに上にあげ、いつもと変わらない笑顔を作り選手達を見つめる。

晴人「よし！これからもお前らの事をずっと見られるぞ！！」

そんな無邪気さまで感じる素直な晴人を見て、選手達は驚き戸惑った。

沙羅「何考えてるんですかコーチは？変わらず私達は私達で勝手に練習やりますから！」

何もなかったかのように、いつも通りプールに入る4人の女子選手。そんな気持ちのこもった晴人と店長のやり取りを見ても、女子選手達はまだ心が動かないようだ。泳ぎ始めようとする彼女らの横で、拓也が一步前に出るとゆっくりとその口を開いた。

拓也「インターハイ……………」

残りの選手達全員が拓也を見る。

拓也「うちのクラブの男子選手は4人……………みんな同じ高校です。4人で泳ぐインターハイのメドレーリレー……………その標準タイムを切ってインターハイに出場するのが俺達の目標です。」

拓也と2人で語り合ったその日。その時は教えてくれなかった夏の目標……………それを口にする拓也の姿を見た晴人が震える声で

答えた。

晴人「そっ・・・・・・・・・・そうか。それが夏の目標だな。」

拓也「コーチ！・・・・・・・・・・コーチの練習をやれば・・・・・・・・・・目標は叶いますか？俺達をインターハイに連れて行ってくれますか？」

晴人は、力強い表情だけでゆっくりと首を縦に振った。

そんな晴人を見た拓也は、晴人に近づき手に持つ手書きの練習メニューをとると、ゆっくりと頭を下げながら答えた。

拓也「コーチ・・・・・・・・・・今日からよろしくお願いします。」

その拓也の行動を見て、今まで黙っていた男子選手達も横に並び頭を下げる。

男子選手一同「・・・・・・・・・・よろしくお願いします！」

みんなが右だから右を向く。そうではなく、誰かが左を見たからみんなも左を見る。その左が正しいのだとわかり始めた選手達・・・・・・・・・・晴人の気持ちと行動が、ついに選手達の心を動かしたのだ。

そんなやり取りを、またプールの天窓から覗く2人の影が・・・・・・・・

木島「店長！なんであそこで首を切ってやらなかったんですか？？
十分いいタイミングだったのに！選手コースを潰すチャンスでしたよ！！」

それを聞いた店長が、力強い顔でプールを見ながら言った。

店長「・・・・・・・・・・久しぶりに見たよ・・・・・・・・本物の水泳コーチの顔・・・・・・・・・・」

木島「・・・・・・・・・・えっ????何言っているんですか??」

木島の反応に我に返った店長が、首を横に振りながら冷静に言った。

店長「・・・・・・・・いやっ・・・・・・・・なんでもない・・・・・・・・毎日泊まりで仕事をやるって言っているんだぞ?見せてもらおうじゃないか!水泳コーチがどれだけやれるかを!!!!それに・・・・・・・・・・」

店長が目線を晴人から女子選手達に変える。

店長「あの、女子選手達は一筋縄じゃ行かないだろう・・・・・・・・・・」

ずっと認めてくれなかった選手達、理解をしてくれなかった選手達あれだけ動かなかった選手達の心を、ついに晴人は動かす事が出来た。大きな進歩を遂げた選手達を見ながら、晴人は達成感に満ち溢れた笑顔で初めての練習を開始した。

そんな空気の中、4人の女子選手達はおもむろに、晴人を無視した今までと変わらない態度で自主練を続けていた。

出来ない練習

翼「なあ．．．．もう水元コーチが担当になって何日も経つけど．．．．どう思う??」

とあるコンビニエンスストアで立ち読みをする2人の会話。

翔太「あ．．．．ああ．．．．正直俺じゃあ．．．．．ついていけないーかな」

なんだかやる気のない発言をするこの高校生。彼は、選手の翔太^{ショウタ}、高校2年生だ。遊び人のようなチャラさも少し感じる、軽さと適当さが目立つ今時な高校生だ。

翼「バカ！お前は練習弱すぎるんだよ！！」

4人の男子選手の中でも練習が比較的よく出来る翼。そんな翼が、普段から練習が出来ない翔太を馬鹿にする。すると今度は視線を窓の外、遠くに変えて静かに言った。

翼「でも．．．．．そうじゃなくても、きつすぎるよな．．．．あの練習は．．．．．」

拓也と同じく真面目で、水泳に対してもまっすぐな翼。そんな翼は、晴人が作る練習内容に少しの不信感を抱き始めていた。

翔太「．．．．おっ！！今週号、俺の好きな子がグラビアじゃね？
？やったあ！ラッキー♪」

雑誌に夢中になる翔太の横で、開いた本にも目も向けず、遠くの一点を見つめながら深く思いふける翼がいた。

その日の練習・・・プールサイドでは相変わらず女子選手達が自分勝手に練習を始めている。その横で、男子選手達にこの日の練習メニューを説明する晴人。

晴人「よし！！今日はトレーニング練習！！苦しくてもしっかり乗り越えて来るんだぞ！！」

すぐに顔を引きつら、苦笑いの表情で答える翔太。

翔太「あの・・・コーチ。昨日もトレーニングでしたよね??」

それを聞くと晴人は満面の笑みで答えた。

晴人「そーだな！水泳の基本はトレーニングだ！！どんどん泳いでその日泳いだトータルを増やして、一步步成長していこう！！なので・・・昨日より今日のほうが練習トータルは多いぞ！！」

日に日に練習量が増えていくその練習。そのトータル距離は、彼らが今まで練習してきた1日のトータル量とは、比べ物にならないほどの量になっていた。

翔太「はっ・・・8km??8キロも泳ぐのか??おい、今までこんなのやったことねーよ・・・出来んのかよ！拓也は！！」

練習メニューを見た翔太が、晴人に聞こえないような小声で拓也に言う。それを聞いた拓也が同じような小声で答えた。

拓也「やったことないけど……やってみようよ!! 出来るかもしれないだろ!!」

渋々といった雰囲気泳ぎ始める選手達。

水しぶきを上げながら泳ぐ選手達を、大声で煽り叫ぶ晴人。

晴人「いけ!! いけ!! 回れ! 回れえ!!」

練習は200m10本。泳いで休んで、泳いで休んで、を繰り返すインターバルでの練習だ。スタートして2分20秒後に次をスタートさせる。なので2分20秒以内に200mを泳いで、すぐに次をスタートさせなければならない。あまりにも過酷な持久力トレーニング。

晴人は200mを終えた選手達に、休む間もなく次のスタートの合図をした。

晴人「よし!! 3本目だ!! すごいけ!! よーい……ハイ!!」

気合いの入ったスタート。見ると一人の選手が、その合図ではスタートをせず、止まったままプールの中でうずくまっているのが見えた。

晴人「あれ??? おい!! どーした翔太! 何でスタートしない?」

翔太はゆっくり顔を上げると、自信なさそうに小声を漏らした。

翔太「コーチ……すみません。トイレ……」

明らかに練習が辛いからといったうその表情……それを見抜いた晴人は……

晴人「何言つてんだよ！！練習途中だろ！！がまんして泳げ！！」

と叫び散らした。

その声が聞こえてか聞こえずにか、サツとプールを上がるとトイレのほうに足早で駆け出す翔太。

晴人「ちょ……おい！翔太！！ちょっと待て！！」

結局翔太が帰つてこないまま、その200m10本の練習が全て終了してしまった。練習を終えた選手達が、息を上げ不満そうな表情を見せる。

晴人「とりあえず全部終わったようだな……全部間に合ったやつはいるか???いたら手を上げてくれ!!」

2分20秒で間に合ったかの質問。それを聞いた翼が、少しの憎しみも感じる言い方で答えた。

翼「いるわけじゃないですか……そんなの……」

その反抗的にも感じる翼の態度に気が付いたのか、晴人はその嫌な空気を壊すように強気でコーチャらしい振舞いをした。

晴人「そ……そうか……。お前らの努力が足りないんだぞ!!!!もっと気持ち入れてやれば出来たはずだ!!!!気合いが足

らないんだよ気合いが!!」

翼「いい加減にして下さいコーチ!!!!」

翼の中に溜まり続けていた練習への不満。それが自分の中では消化し切れないほど大きくなった翼は、ついにその不満を晴人に向けて爆発をさせてしまった。

翼「俺達、今まで200mは2分40秒でしかやった事ないんですよ??それをいきなり2分20秒で回って言われても、出来るわけがないじゃないですか!!!!」

一気に空気が悪くなるプールサイド。

翼「まだ……リレーでインターハイのタイムも切っていないんですよ……俺達のレベルを考えて下さい!!コーチ!!!!」

翔太「自分がやってきた練習を、ただ俺達にやらせてるだけなんじゃないの??日本選手権に出られるような高校生とは、俺達はわけが違っんだよ!!」

いきなりの声に驚いた晴人がその声先に目を向けると、トイレに行っていた翔太が斜め下を見つめながらふてくされた態度でプールサイドに立っているのが見えた。

翔太「行こうぜ……翼!!」

その練習に納得が行かない翔太が翼を呼び寄せる。翼は一瞬睨むように晴人を見ると翔太と一緒に更衣室へと消えて行った。

愕然とたたずむ晴人。それもそのはず、実際に彼らの言う通りの事しか出来ていない自分がいたからだ。自分がやってきた練習をやっているだけ……正直今の晴人には、それが精一杯の練習方法でしかなかった。

そんなもめ事があつたプールサイドを、天窓から見つめる彩香と木島。たたずむ晴人の姿を見て、木島が茶化すように言った。

木島「やれやれ……問題が絶えないですね。選手コースは……」

木島は見下した笑みを見せると、そのままスタッフルームに消えていった。その横で、彩香は何かを思う複雑な表情を作りながら、晴人を見つめていた。

コーチとしての成長

彩香「駅まで一緒に帰りましょ！水元さん！」

スタッフルームで仕事をする晴人が、ふっ．．．と息をつき、帰ろうかという雰囲気になったタイミングを見計らったの彩香の誘いだ。誘われた晴人も、この日は特別用事もないので、迷いも疑いもなく答える。

晴人「あっ．．．はい。いいですよ。」

二人で歩き始めた夜の道、妙な静けさがある喋りづらい雰囲気だ。拓也との帰り道を思い出すような少しのテレと緊張感がある。その雰囲気壊して最初に喋ったのは、晴人ではなく彩香。綾香はきつめな真顔で、大胆な一言を口にした。

彩香「自分が選手だった頃の練習をやっても駄目だぞ！！！」

突き刺さるようなその一言。晴人は今までの彩香との関係もぐち壊してしまうほどの迫力ある言い方に、驚き固まってしまった。

彩香「私が競泳コーチとしてアルバイトしていた頃に言われた一言です。」

笑顔に変えた彩香を見て、晴人は『それでそんな言い方をしたのか．．．』と心で納得をした。

晴人「えっ??それじゃ森下コーチは、競泳コーチをやった事があるんですか??」

彩香「ええ。1年だけですけど。その時、指導方法を教わっていたコーチに言われた一言。それが、さっき言った『自分が選手だった頃の練習をやっているも駄目だぞ!!』です。私も小さい頃から水泳をやっていた選手上がりのコーチなんです。水元さんの選手時代見たく、いい結果は出せていませんけど……。」

少しの間をおくと、彩香は懐かしく振り返るような表情を見せた。

彩香「……今日の水元さんを見ていて、同じだなんて……あの時の私と。」

深刻な顔でうつむき、その心境を語りだす晴人。

晴人「……そうなんですよね。選手時代にやらされた事をただやっているだけ……。でも、今の自分にはそれが精一杯の指導方法なんです!!それ以外の練習方法なんて、指導経験がない自分にはまったく思いつかないですし……。それでもやっぱり、選手達の言う通り……。当時の自分と今の彼らでは、出来る練習のレベルが違う。選手に言われて始めて気づかされるなんて……。ほんと情けないよ……。」

自分の非力さを痛感する晴人。そんな、晴人を見て彩香が元気づけるような明るい顔を見せた。

彩香「実は今日、私が1年間競泳指導を教わっていたそのコーチと呑みに行くって話しになっっているんです。もし良かったら……。一緒に行きませんか??」

一瞬立ち止まり、悩み考える晴人。

このままでは確実に、また信頼を失い選手との距離が広がってしまう。指導経験のない浅はかな知識。自分自身がコーチとして成長をしなければならぬ。その為にも、本物の競泳コーチから、本物の競泳指導を学ぶ必要があるのは明らかだった。その事の重大さが分かっている晴人は、一際重く意志の強い表情に変えると、はっきりと答えた。

晴人「ぜひ・・・お願いします！」

職人コーチ松山との出会い

個人経営の飲食店が目立って並ぶちよつとした繁華街。その中に店を構えるところある古い居酒屋。オシャレ居酒屋が流行る中、今時珍しいほど古びた居酒屋だ。お客の多いこの時間帯。店内は騒がしく活気だっていた。

松山「ほんと久しぶりだな！！よくまだこの水泳業界に残っていてくれているよな！！」

笑顔で彩香に話しかけているこの男性。彼が彩香に競泳コーチの指導をした元上司、松山昭雄だ。マッヤマアキオ年齢は40代後半、中肉中背だが見た目は怖く、一見するとその道の人と間違えてしまうほど。鋭い目つきをした強面の競泳コーチそのものだ。

彩香「松山コーチの紹介で今の会社に入社出来たんですから。そんな簡単にやめられませんよ！」

水泳業界では顔が広い松山。彩香はそんな松山の紹介で今の会社に入社をしていた。

そんな強面コーチの松山が、今度は晴人のほうを少し睨むように見ると不思議そうな顔で首をかしげる。

松山「で……彼は誰だね??」

晴人「あっ……はっはい！！私は、今月から彩香さんと同じクラブで仕事をする事になった水元晴人と言います！！宜しく願います！」

完全に強面にびびった動揺の自己紹介。そんな緊張と硬さを感じた松山は、すぐに笑顔に変え、安心をさせるように答えた。

松山「そんなびくびくしないでいいよ！！気楽に！気楽にね！！」

彩香「水元さんは今、うちのクラブで選手コースを担当しているんです。それで・・・悩みがあるみたいで、今日は相談をしに来たんですけど・・・」

彩香から出た選手という言葉聞き、松山はすぐに顔つきをきつくまじめな表情に変え晴人にゆっくりと目を向けた。

松山「選手コース？　いつたいどんな悩みだ？？」

少しだけ気が緩んだ晴人だったが、また表情を強張らせた松山を見て『シャキッ！』とした硬い表情に変えた。

晴人「あ・・・はい。練習内容についてです。自分はずっと小さい頃から水泳をやってきていたのですが、どうしてもそのやらされてきた事をやってしまうだけになってしまって・・・いい練習メニューが作れず、悩まされています。」

松山は、目を瞑り目の前のお酒をゆっくりと飲み干す。そして、そっとグラスをテーブルにと置くと、また大きく見開いた目で晴人のほうを睨む。

松山「競泳コーチは職人だ！！」

晴人と彩香は驚き姿勢を正すと、その言葉の続きに聞き入った。

松山「元水泳選手だからいい指導が出来る！！それは間違いだ。人の真似をしても速い選手は育てられない！！真似をするんじゃない！！盗むんだ！！そして、それを自分の指導にする……………」

表情、言い方、伝え方、風貌、どれをとってもまさに職人そのもの。晴人はそんな松山を見て、『競泳コーチは職人』という言葉を肌身で感じた。

晴人「……………教えて下さい！！自分は競泳コーチになりたいんです！！」

自分で選んだ競泳指導の道……………晴人には確かなやる気があった。そんなやる気を前面に出した熱い眼差し。そんな眼差しに真つ向から勝負するように、松山も晴人を睨みつける。そして少しの沈黙の後、また松山がゆっくり口を開いた。

松山「そこまで言うのなら、それなりの経験があるんだろうな？？君は……………水泳指導何年目だ？？」

水泳指導未経験の晴人。そんな未経験者が選手コースを教えているなんて話をしたら、職人として競泳指導を続ける松山は、気分を害すだろう。それを感じ取った彩香が、あわてるような早口で割って入ってきた。

彩香「あっ……………あの水元さんは色々事情があつて、まだまだ指導経験は浅いんですけど……………」

晴人「……………まったく経験がありません。経験ないまま選手指導をしています。」

うそもつけない晴人は、彩香の話途中にその正直な言葉を松山にぶつけた。

すると、より強面を前面に押し出した松山が席を立つ。そして、持っている飲み干したグラスをテーブルに強く叩きつけるように置いた。

ドン！！！！

松山「水泳指導が未経験？？お前なんか水泳指導を教えられるか！！！！水泳はそんな甘くはないんだよ！！！！彩香！！今日はもう終わりだ！！」

晴人の言葉を聞き、甘い考えで水泳指導をしていると判断した松山。松山は気持ちを落ち着かせるように深く息を吐くと、晴人に背を向け入り口に向かい歩き始めた。

晴人「待って下さい！！自分は本気なんです！！！！本気で競泳のコーチになりたいんです！！！！指導経験もないのに選手コースを教えている事に関しては、本当に申し訳なく思っています。でも、それを望んでいたわけじゃない！！！！何年も下済みをして、それからちゃんと選手を見ていきたい。そう思っていました！！！！それでも会社の理由でこんな事になってしまって・・・・もう自分ではどうしていいかわからないんです！だから・・・・助けて下さい・・・・・・
・お願いします！！」

時間が止まってしまったような間・・・・立ち止まった松山は、数秒過ぎても後ろを向いたまま振り返る事もない。

松山「俺とお前は、会社も違うんだぞ。教わる時間だって限られてしまう。時間を割いてでも……教わる気があるのか?」

熱い気持ちが伝わったのか、松山はそれをまた再確認するように、後姿のまま晴人に問いかけた。

晴人「はい。大丈夫です。それが、選手の為になるのなら……自分の時間は惜しみません。」

松山「……日曜日は休み、それ以外は18時から選手の練習だ。お前が休みの日は……必ず俺の職場に来い。」

晴人「えっ……いいんですか??教えてくれるんですね!!」

松山「教えるんじゃない!!お前が盗むんだ。俺からは何も教えない。聞きたい事があつたら、お前から聞いて来い!!」

晴人「あっ……ありがとうございます!!!」

自分の経験不足と指導不足。それが原因で選手達の心は離れていつてしまった。本物の競泳コーチから学べる水泳指導………陰りが見え始めていた晴人に、少しの明るい兆しが差し込んできた。

4人の気持ち

松山と出会ってから数週間、晴人はその全てに全力を注ぎ続けた。

選手の指導に毎日2時間、そこには翼と翔太の姿はなかったが、それでも必死で残り2人の選手の為にプールサイドに立ち指導を続けた。そして、深夜・・・店長との約束通りに夜遅くまで残って仕事を続ける晴人。更には、休みの日・・・その休みを使つて松山の元へ水泳指導の勉強に向かう。そんな、まっすぐに一生懸命な姿に打たれた彩香は、次第に晴人と一緒に選手指導の手伝いをし、松山の元に行くほどの仲にまでなっていた。

そんなある日の学校の休み時間。教室に集まった男子選手4人が水泳について話し合う。

拓也「なあ、ほんとに最近練習変わってきてるから。あのコーチなりに色々勉強してるんだよ！！もう一度一緒にやろうって！！」

翔太「いーの！俺らはもういいから！な！翼！」

そんな軽い返答をする翔太に対して、無表情で答える翼。

翼「ああ・・・」

3人から一歩下がった所で4人目の選手である道春が、自信ない声で答えた。

道春「なんか最近は、毎日の練習に変化があるような気がする・・・」

翔太「ば〜か！！お前がわかるのかよ！！お前はいつものようにお母さんの言いなりになっていればいいんだよ！！マザコン！！」

道春は少し太り気味の見た目をした高校2年生。無口で引つ込み思案な性格で、いつも目立たないがそれでも黙々とひたむきに努力を続ける確かな努力家だ。翔太はそんな道春がいつも母親の事ばかり気にしているのを見て、『マザコン』とバカにしていた。

拓也「いいじゃないかよ、お母さんっ子だって！！道春だって道春なりに頑張って練習しているんだから！！くだらない理由で練習にこなくなるお前よりも全然立派だよ！！」

拓也がそんな道春をかばう。ずっと黙っていた翼が、『くだらない理由』という言葉聞いて、反抗するように拓也を睨みつけた。

翼「くだらない理由なんかじゃねーよ！！練習によって俺達の夏が変わるんだ！！いつまでも納得行かない練習なんかやってられねーだろ！！」

あらぶる翼を見て、拓也が何かを思うようにうつむき、机を見つめる。

拓也「俺・・・聞いたんだ、森下コーチに。水元コーチはあの日から毎日、俺達の指導をする為に深夜まで残ってちゃんと他の仕事やっってるんだってさ。水泳指導も勉強不足だからって、休みの日に違うプール行って教わってるらしいよ。やっぱり、今までのコーチとは違うんだよ！必死で俺達を変えようとしているんだよ！！今は確かに練習内容だっていいとは言えないかもしれない・・・..それでもあのコーチなら変わってくれるって！！」

動きを止め、一度目を合わせると、そのまま視線を落とし黙りうつむく翼と翔太。心動かされ始めている翼と翔太に気づいた拓也が、そのまま続けて畳み掛けていく。

拓也「お前らあれからまったく泳いでいないんだろ??そのままではほんとにいいのかよ!!お前らの水泳はこれで終わりなのかよ!!俺達が目指すインターハイはもう終わりなのかよ!!」

その言葉には、さすがに黙っていられなくなった翔太。

翔太「そりゃ・・・良くはねーよ・・・インターハイだっていきよ・・・でも・・・無理なら仕方ねーし・・・」

小声で最後は聞き取れなくなってしまった。そんなやり取りを聞いていた翼は、窓から校庭の遠くを見ると、何か悩ませるような複雑な表情を見せた。

アルバイトをする翼

日も落ち、暗さを帯び始める街中。マンションや小さなビルが立ち並ぶ一角に、ちよつとした工事現場がある。そこでは作業着を着た男性達が、黙々と重い砂袋や鉄板などを持ち運び仕事をしている。その中に一際目立つ若い男性が一人。工事現場に誰かを探しにやってきた晴人が、その若い男性を見つけると大声でその男性を呼び止めた。

晴人「翼!!」

工事現場で働くその若い男性は選手の翼だった。その声に驚き振り向くと、持ち上げようとしていた砂袋を下に落としながらつぶやく。

翼「コーチ……」

2人は、ちよつとした歩道の一角に腰をおろし、話を始めた。

晴人「森下コーチに聞いたよ。練習がオフの時は、日雇いで工事現場のアルバイトをやってるんだってな。」

全てを知っていたと言う事を翼に伝える晴人。翼は強がった顔を見せながら言った。

翼「だからなんですか？オフの時に何やってようが俺の勝手じゃないですか。」

水泳に忙しいはずなのに、なぜか大切な休みの日を使ってまでアルバイトをする翼。その行動が知られなくなかったのか、翼は晴人と

目を合わせようとはしなかった。そんな翼を見て、晴人は笑顔でため息をつくと続けるように言った。

晴人「選手コースの月会費を稼いでるんだってな……親が厳しいから月会費を払ってくれないって聞いたぞ。」

アルバイトを続けているその確かな理由。翼は強がる姿勢を崩さずに、思い悩むような無言で歩道を見つめ続けた。すると晴人は、ずつと強がっているそんな翼が驚き、顔を上げるほどの大胆な行動を起こした。

地べたに両膝をつき、両手をアスファルトの歩道に付ける。そして、そのおでこをも歩道に付け『土下座』の姿勢をとった。

晴人「悪かった！！そこまでして水泳に本気で……自分で金稼いでまでして続けた水泳なのに……納得のいく練習が出来なくて、本当に申し訳なかった！！」

親に理解してもらえなくて……自分で稼いで月謝を払って……そんな無理をしてまでして続けた水泳。晴人にはそんな翼の気持ちが痛いほどよくわかった。何よりも、そんな翼に対して満足いく練習が出来なかった自分が情けなく思えたのだ。

晴人はその気持ちを伝えると顔を上げ、強い眼差しで力強く言った。

晴人「お前のその気持ち……絶対に無駄にしないから！！絶対に期待に答えるから！！もう一度……もう一度だけ俺を信じてくれ！！！」

熱い眼がしらを翼に見せる。そして、またそのおでこをアスファル

トに付けると大声で叫んだ。

晴人「俺のせいで・・・水泳をやめないでくれ!!!!頼む!!!!!!」

そんな晴人を無言で見つめる翼。その目は、悲しい同情にも似た、
熱い信頼の目をしていた。

取り戻した信頼

選手の練習時間が近づくスタッフルーム。その一室で、店長と木島がまたしてもヒソヒソと悪巧みの会話を始める。

木島「いよいよやつも終わりですね。選手も2人辞めそうですし・・・これでやっとプールのコースも増えて大人のフィットネスクラブらしくなる。」

『しめしめ』といった憎たらしい顔をする木島。しかし、店長は何故か首をかしげ悩ましい仕草をしながら答えた。

店長「どうだろうな・・・まだまだそんなうまくはいかないように感じるが・・・」

晴人「さあ！今日の練習を始めるぞ！まずアップから説明する！アップは・・・」

プールサイドでは選手2人に練習メニューを説明する晴人がいた。

翼と翔太はこの日も練習には顔を出していなかった。晴人は自分の思いを全て翼にぶつけた。それでも練習に来てくれないのであれば、諦めるしかない・・・そこまでの覚悟を持っていた。

すると突然を思わせる勢いで、2人の水着姿の男が更衣室から現れる。

拓也「翼！！翔太！！」

その2人は、ずっと練習に来ていなかった翼と翔太だった。

2人は嬉しく叫んだ拓也の横を素通りして、そのまま晴人に歩き近づいた。そして、晴人の前で立ち止まると、深い表情で覚悟を伝える。

翼「……………次、納得いかない練習があったら……………
・自分は水泳をやめさせて頂きます。」

その横には、翼と同じく決心の強い表情をした翔太がいた。

2人の決意。その言葉には今まで続けてきた水泳に対する決意を示した気持ちが込められていた。そしてそれは、晴人に対する最後の賭けのような一言でもあった。

晴人「お前達に水泳はやめさせない。もし、また俺を信用できなくなったらすぐに言ってくれ。俺が競泳コーチを辞める。」

晴人の迷いのないストレートな言葉。『そんな簡単に水泳をやめるな』でも『そんな気持ちだったら水泳をやめてしまえ』でもない、説得力ある晴人の本意。『2人に非はなく自分が間違っているのだ』と言うその姿勢がまた、2人の心を強く突いた。その気持ちを聞いた2人は、機敏に礼儀正しい一礼をした。

2人「宜しくお願いします!!」

その姿を見ながら、何回も大きくうなづくように首を縦に振る晴人。そしてまた、インターハイを目指す4人での練習がスタートをした。なくしてしまったコーチとしての信頼。それをまた勝ち取り、コー

チとしての成長を遂げた晴人。4人は晴人を自分達のコーチとして
ついに認めたのだ。

彩香「良かったですねー。水元コーチ。」

その時、彩香が始めて水元をコーチと呼んだ。それはある意味、彩
香にとっても晴人をコーチとして認めた瞬間だった。

彩香「後は……。」

ゆっくり目線を女子選手達に向ける彩香。

彩香「彼女達をどーするかですね。」

そんな目線を追うように、晴人が自主練をする彼女達を見つめた。
そして深く何かを考えるような表情を作ると、彩香に目線を戻し思
い立ったように口を開いた。

晴人「男のコーチでは、伝わらない事もあるのかもしれない……。
彩香コーチ。申し訳ないけど一度彼女達と話をしてくれませんか？」

最後の望みとも言うべき女性である彩香の存在。彼女が味方につい
ていてくれる事に甘えた晴人の一言だった。

それを聞いた彩香は、いつもより真面目な硬い表情に変え答えた。

彩香「はい。わかりました。」

見つめる視線の先にいる女子選手達は、そんな決意を決めた彩香に
気づく事もなく練習を続けていた。

試合を目指して

女子選手達は練習を終えるとプールサイドに一列を作り、揃ってプールに向かって軽く一礼をした。それを終わるとすぐに水泳道具を片し、帰り支度を始める。

彩香「あつみんなちよつと待って!!」

とめられる声に反応すると、振り向きながら沙羅が答えた。

沙羅「なんですか??森下コーチ。」

それと同時に残りの女子選手達も彩香のほうに目を向ける。相変わらず冷たい表情の4人。

彩香は、そんな4人をプールサイドの隅に集めると話を始めた。

彩香「みんな・・・このままずっと自分達で練習続けるつもりなの??それで本当にいい結果が出るのかな?」

きつめなコーチらしい言い方と、女性同士の会話。そんなバランスのとれた話しやすい喋り方で話を進めた。

沙羅「・・・正直、自分達にも分かりません。だけど、もう自分達だけしか信じられないし・・・自分達でやらないといけない事だと思うから。」

維持を張っているようにも感じる意志の強いその答え。

彩香「でもそーやって、もう何回も大会でベストタイム出せていないよね？」

ずっと出ていないベストタイム。それはもう数年にまで及んでいた。それを聞いて少しむっとした表情に変えると、沙羅がきつい言い方で言い切った。

沙羅「次の大会は違います！！絶対にベストを出しますから！！」

彩香「男子も同じなの。もうずっとベストタイムを更新していない。来月の大会・・・男子に負けず、女子も必ずベストタイムを出せる自信がある??」

それを聞くと、4人同時に強い表情でしっかりとうなずいた。

彩香「わかった。無理して水元コーチの練習をなさいとは言わない。でももし、気持ちが少しでも変わったら、その気持ちを隠さずに正直に言つて。いつでも水元コーチは受け入れてくれるから。そして、お互いに来月の大会でベストタイムが出せるように頑張りますよう！」

無理な事を言わず相手の気持ちも考えて・・・そんな話でうまくまとめる彩香。遠くでは男子選手達と一緒に盛り上がる晴人の姿があった。

晴人「よし！来月の大会は、この調子でベストタイムを出すぞ！！」

笑顔で盛り上がる5人。

結果が全ての水泳。どれだけ選手の心を掴んでいても、その結果が

タイムに出なければ選手の信頼は勝ち取れない。晴人がコーチになって初めての大切な大会。その運命を分ける大会の日が刻一刻と近づいていった。

仕事ではない大会

晴人「えっ！！どういことですか？店長！」

スタッフルームにこだまする、怒りのこもった晴人の声。

晴人「なんで自分が大会会場に行けないんですか？？」

それは、大会会場に行くのを拒否された事による怒りの声だった。

店長「そんなね・・・お金にもならない大会なんかに、スタッフ1人出してられないんだよ！！！！」

利益にならないその仕事。晴人を大会に選手引率をさせてしまうと、逆に晴人にかかる人件費で会社としての利益がマイナスになってしまう。

店長「なので行かせられない！！もう高校生と中学生だろ？勝手に自分達で行かせておけばいいんだよ！！選手達に！！」

晴人はそれを聞いて、更にむっとした表情に変え声を張った。

晴人「何を言っているんですか店長！選手と言ってもお客さんですよ！！勝手に大会に行かせて、何かあったらどーするんですか！！うちの会社の責任になりますよ！？そんな事ばかりしているから選手達がコーチを信頼できなくなってしまうんです！」

そんな晴人の叫びにも、無情な言葉しか漏らさない店長。

店長「……………それがうちのやり方だ。それで文句を言う親や選手がいるなら……………そんなやつは、やめてしまえばいい。」

晴人には心ないその発言が、遠まわしに言う『さつさとやめてほしい』という言葉に聞こえた。晴人はもう完全に店長に対する信頼をなくしてしまった。

晴人「……………日曜日はもともと自分の公休日です。『休みだから大会を見に行く!』それだったら構わないんですよね?」

店長は興味ない話を聞き流すように、そっぽを向く態度で答えた。

店長「……………勝手にしなさい。」

会社に対する不信任感。それが日に日に大きくなる晴人。膨らむ不信任感と同じように店長との衝突は、日に日に激しさを増していた。

大会会場

人通りが激しいとある駅。そこから徒歩数分と程近くにある大きな水泳場。50mのプールが全部で10コース、観覧席も広く大きくて、数多くの国際大会も開かれていた立派な水泳会場だ。そんなプールに色々なスポーツクラブの数多いコーチと、500人を超す選手が集まった。選手が泳ぐプールを、上から見下ろせる大きな観覧席まで歩き進むと、笑顔の晴人は伸びをしながら大きな声で叫んだ。

晴人「うわー久しぶりだなあー水泳の大会会場!!」

自分が選手だった頃を思い出して……。そんな表情を見せる。その横で、休みの中付き添いでわざわざ来てくれた彩香も同じように懐かしい表情を見せた。

彩香「そうですね……。ほんと、思い出します。」

4人「水元コーチ!!」

そこに、教え子である4人の選手がやってきた。

晴人「おーみんなか!!今日はしっかり結果出していいっな!!」

これまでの練習に手ごたえを感じている晴人。その言葉には確かな自信がみなぎっていた。

晴人「体調は大丈夫か??」

翔太「はい！！もうバッチリです！！ただ・・・道春だけは、お母さんがいなくてホームシック気味ですけど・・・」

道春「ばっばか！！そんなわけないだろ！！」

道春の『マザコン』ネタを言いながら、みんなで笑いあう。そんな選手達の姿は、本当に自然体でリラックスをしている。どこか安心感まで漂わせていた。

ウォーミングアップ。レースまでの時間を使ってプールで簡単なアップをすることが出来る。その時間だけはコーチもプールサイドに行き、泳ぎを見たり、もちろんコーチとしての簡単なアドバイスをすることもできた。晴人もそこで、男子選手達4人に、レース前のアップ指導を始めた。

松山「晴人！！」

そんなアップの指導をしていると、遠くのほうで晴人を呼ぶ声がする。少し探しながらその方向に目を向けると、そこには競泳コーチの師匠である松山が立っていた。

晴人「松山コーチ！！」

2人は横に並ぶと、プールでアップをする選手達を見ながらの簡単な会話を始めた。

晴人「松山コーチもいらしてたんですね！」

知らない人ばかりの大会会場。その雰囲気にもまれていた晴人は、なんだか身内に出会えたようで、嬉しい顔になっていた。

松山「ああ……お前の所と違って、うちの選手は大切な勝負の大会だからな……」

その勝負をする選手を顎で『こいつだ』と指す動きをしながらの松山の言葉。

晴人「彼ですね……勝負するのは……」

松山「そうだ。日本選手権……その標準タイムをもう少しで切れそうなんだよ……」

晴人にとっては、聞きなれているその『日本選手権』という言葉。出場タイムの厳しさを知っている晴人は、その言葉を聞いて気を張った表情に変えた。

晴人「自分もこの何週間か、彼の泳ぎを見させてもらいましたが……可能性は十分だと思います。……松山コーチ！期待しています！！」

そう言った晴人が視線を松山からその奥に変えると、そこに女子選手達4人が、ウォーミングアップの準備をしているのが見えた。それに気付いた晴人は、松山に挨拶をすると、ゆっくりとその女子選手達のほうへと歩き寄っていった。

晴人「……ついに来たな、大会当日。ベストが出せるように……頑張れよ。」

無理に関わりすぎないように……そんな事に気を使いながら、落ち着きを持って話しかけた。すると、沙羅がまたしてもきつい顔

を見せる。

・
」 沙羅「私達のやり方でも、結果が出せる所を必ず見せますから・・・

相変わらず気の強い沙羅。そんな捨て台詞のような挑戦的な言葉を残すと、すぐにプールに入り4人でウォーミングアップを始めた。

運命のメドレーリレー

開会式も終わり、競技が開始。次々とレースがスタートをする。一気に高まるレース前の緊張感。

今回、男子選手の4人がエントリーした種目は、個人種目で一番得意な泳ぎの100mと、4人で100mずつ泳ぐ勝負の400mメドレーリレーだ。最初に泳ぐのがそのメドレーリレー。翼の背泳ぎから始まって、道春の平泳ぎ、拓也のバタフライ、翔太のクロールの順番だ。それぞれが100mを泳いで全部で400m。目標にしているインターハイのタイムは、4分00秒82。このタイムと同じか速ければインターハイに出場ができる。もちろん、インターハイの予選でそのタイムを切らなければ出場はできないが、この大会でどれだかよいタイムが出せるかが大きなポイントになっていた。

レースの時間が近づき、極度の緊張に襲われる4人と晴人。その緊張をほぐすように晴人がコーチらしい態度で4人に言った。

晴人「大丈夫だ！！俺を信じてくれ！！今までとは違う！！お前ならできる！！」

お互いが信じあえるようになった選手とコーチ。そのコーチの言葉として、その一言一言に確かな重みを感じた。

4人はもう1年以上もベストタイムを更新していなかった。それは、個人種目でもリレーでも同じ。そんな4人にしっかりとした自信を持たせるその言葉。それを聞くと、4人は強くうなずきあい、気合を入れてプールサイドへ向かった。

ついに、結果を試すレースがスタートをする……緊張の間だ。プールに入り、スタートの合図を待ち構えるのは最初に泳ぐ翼……。晴人は息をのんだ。しっかりとした、数字の結果を求めて……。

その奥では、4人の女子選手達がそのレースを静かに見守っていた。

出発合図員「よい………ピッ！！！！！！」

スタートのピストルシグナル音による合図！勝負が始まった。

勢いよくスタートを切る翼。大きな泳ぎで進み、ターンもしっかり決めて……。100mタッチ！すぐに、2泳者の道春が飛び込んだ。それと同時に、コーチである晴人が手持ちのストップウォッチのラップを止める。翼のタイムがここでわかる！そのタイムを見る晴人。

晴人「よし！！速いぞ翼！！いける！！いけるぞ！！」

気持ちが入る晴人。止めたタイムは間違いない、翼のベストタイムだった。続く道春も100mのタッチ！！

晴人「よし！！そのままだ！！いけいけ！！」

続く拓也の応援に熱が入る。女子選手達がそんな興奮する晴人を見て、一瞬うらやましそうな……。悔しそうな表情を見せた。

晴人「よし！！！！ラストだ！！！！翔太あああ！！！！いけええ！！！！」

更に興奮する晴人。そんな興奮のままついに……最終泳者の翔太もゴールをした。

そのタイムが表示される、頭上に輝く大きな電光掲示板。

彩香「どーですか？？ベストですか？？」

同じく興奮状態の彩香がその結果に焦り晴人に問いかけた。その言葉聞いてか聞かずに、晴人は大きなアクションでガッツポーズをとった。

晴人「やった！！！！ベストタイムだああああ！！！！！！」

まだインターハイの標準タイムには届かない4分01秒92。それでもそのタイムは間違いない彼らのベストタイムだった。

観覧席から立つと4人に手を振り、片腕で力強くガッツポーズを見せる晴人。4人はそんな晴人を見ながら涙ぐむ目で手を振った。

ずっと出なかったベストタイム。諦めかけたその夏の勝負。その勝負をまだ諦めなくていいとそのタイムが教えてくれた。涙ぐむ選手達にはそんな思いが感じられた。晴人がコーチとして間違いない結果を出したのだ。

命運を分けるレース

ベストタイムの興奮冷めやまぬまま、次々と進んでいくレース展開。4人にはまだそれぞれの個人種目が残っていた。

最初は、拓也と翔太の自由形。メドレーリレーのベストから気合いが入っているようだ。そんな2人が同時に泳ぐレース。その、スタートの合図が鳴った。

晴人「いけー！！いけー！！……よし！！ベストタイムだー！！」

拓也も翔太も見事にベストタイム！笑顔で余裕あるガッツポーズを見せた。

続くは、翼の背泳ぎ。

晴人「余裕だぞー！！いつちやえよー！！」

もう、自信に満ち溢れている晴人は、余裕の笑顔で応援した。

晴人「よし！ベストオオオオー！！」

続く、道春の平泳ぎ。

晴人「くそおおー！！おいしいー！！」

ベストには届かない道春のタイム。それでも、今までの道春にとってはかなりの好タイムだった。

そんな、ベストの猛ラッシュが続く中、女子選手達は静かにそのベ

ストの数々を見守っていた。

女子選手のレースは、この日は1つだけ、勝負のフリーリレーだ。目指すは全国中学校の標準タイム。

女子選手達は大きく息を吸い、気持ちを落ち着かせた。

美月「そろそろ、セカンドアップいこつ!!」

男子チームのベストが続いて、なんだかいごちの悪い雰囲気。それに気を使った美月の言葉だった。それにうなずくと4人は気の張った表情で2度目のアップをしに、アップ用のサブプールに向かった。

晴人「いやあゝみんな良くやった!」

晴人が観客席で男子選手達4人を迎え、みんなの肩を称えるように叩く。その顔は達成感出しまくりの嬉しい表情だ。

拓也「先生のおかげです。本当に……本当に先生のおかげです!」

目には、いっぱいの涙が溜まっていた。

翼「まだまだこれからです。あと少しでインターハイのタイムが切れる……自分達の目標を叶えさせて下さい!!」

あれだけもめていた翼も、信頼と尊敬の言葉を漏らす。その横で、いつも引つ込みがちな道春も元気な声で言った。

道春「これからも宜しくお願いします!!」

翔太「バカ！！お前だけは大好きなお母さんに水泳教われ！！」

道春「なっ・・・何言っただよ！！俺は、マザコンじゃないって言ってるだろ！！」

またしても道春のマザコンをバカにする翔太。そんなくだらない話をしながら、またみんなで楽しそうに笑いあった。

そんな笑顔の中、晴人が観客席の奥に目を向けると、まだその緊張から開放されていない松山コーチの姿が目に入った。

その深刻すぎる表情を見て、すぐに晴人はそのレースに近い事に気が付いた。晴人は顔をまた強張らせた緊張の表情に変わると、ベストに沸く選手達がいるその場から離れ、ゆっくりと松山に近づいていた。

晴人「松山コーチ。もうすぐレースですか・・・？」

松山の真横に立つと、気を使った静かな話し方で声をかけた。もちろん、そのレースというのは日本選手権がかかったあの選手のレースの事。

松山「ああ・・・もうすぐだ・・・」

『コーチは、職人だ！』そう言い切った松山の表情は、まさに職人そのもの。手に職をつけたベテランの職人顔だ。それでも、やはりこのレースには緊張をしているようだ。何度も、手に持つ大会のプログラムを開き、自分が待つべきレースの順番を確認していた。

松山「・・・ついに来た・・・次だ。」

目を見開き、プールを見つめるその顔。その姿は待ちわびた緊張感を楽しんでいるようにも見えた。

彩香「なんとかタイム、切れるといいですね……」

いつの間にかその場にいる彩香。そして、そのすぐ横にいる晴人も一歩前に出て言った。

晴人「大丈夫ですよ……。松山コーチは実力がある！！松山コーチなら切れる！！」

そう言った晴人を、鋭い目で睨む松山。

松山「何を言ってるんだ！！俺が切るんじゃない！やつが切るんだ！！俺はやつの力を引き出せるようにコーチをただけ！！コーチの力じゃない！！やつの力で切るんだ！！！！」

職人の松山からの叱りある言葉。自分の力と思わずに選手の力と思え！という事を言いたいのだろう。言われて納得。すぐに晴人は、自分の間違いを訂正するように縮こまりながら謝った。

晴人「すつすみません。」

ピッピッピッイイイイ……

彩香「ほら！！レースが始まりますよ！！」

出発員「よい。」

ピッ……！！

レースが始まると、すぐに晴人が気合いの入った応援を始めた。

晴人「いけー！！ハイッ！！ハイッ！！」

リズムに合わせて、掛け声を叫ぶ、水泳独特の応援方法だ。興奮をする晴人の横で、静かにその200mの中盤、100mのラップタイムを見る松山。

松山「これじゃ・・・ダメだ・・・」

ずっとその選手を、コーチし続けてきたからこそ分かる現実。松山の予想タイムとは違い、そのタイムは大きな遅れをとっていた。

晴人「切れそうにないんですか??」

その言葉を聞き、不安な顔のまま松山が言い切る。

松山「・・・しかし・・・コーチとして最後まで諦めてはいかん。」

目で選手の泳ぎを追い、そのゴールまでを見届ける。そしてゴールした選手のそのタイムは・・・

松山「・・・くそっ！！・・・」

肩から力を落とす松山。

彩香「どこが悪かったんだろ・・・前半かな・・・?」

晴人「そうですね。前半にもっと突っ込めれば違ったかもしれない。後半の泳ぎは乱れていたし……」

松山「結局はコーチの責任なんだよ！前半突っ込ませられなかったコーチの責任。後半の泳ぎを安定させられなかったコーチの責任。選手には非はない。その力を引き出せなかったコーチが悪いんだよ。それをしっかり理解していないと……いい職人にはなれない。」

松山の考え方。というより、職人としての答えなのだろう。深く、考えさせられるその言葉を聞いて、晴人もまた深くうなずいた。

松山「……また、出直した。じっくりいくさ……じゃあな」

寂しい後ろ姿。勝負に負けたその後ろ姿は今までの松山にはない、どこか弱弱しさを感じさせた。

彩香「……もうすぐ……あの子達も……勝負みたいですよ。」

彩香が見つめるその視線の先。晴人も目でその方角を追うと、そこには女子選手達4人がプールサイドでストレッチをしている姿が見えた。

晴人「彼女達なりの成果を……見せるところだな……」

果たせない目標

ピッピッピッイイ〜……………

出発員「よい……………」

ピッ!!!

女子選手達の運命を分ける出発のシグナル音が響いた。

1番目の泳者は舞、続いて美月、更に華と続き、最後は沙羅。
その泳ぎを見ながら、晴人もストップウォッチでタイムを刻んでいた。

晴人「ダメだ……………このままじゃ切れない……………」

1人1人のタイムをストップウォッチで確認する。そして、最後の沙羅が泳ぎきると、手持ちのストップウォッチでそのトータルタイムを見た。

晴人「全然だな……………全国中学校のタイムなんか到底届かない。」

肩を落とす晴人を見て、すぐに彩香が聞き寄った。

彩香「ベストタイムはどうなんですか？」

その質問に、晴人は大きく首を横に振った。

レースを終えて、すっかり肩を落とし落ち込む女子選手達。そのま

ま静かに、サブプールの方へと消えて行った。それを見た晴人は、深く悩む表情を見せると静かに『すー．．．』と観覧席を立ち上がり、女子選手達を追いかけるようにサブプールへと向かった。

彩香「あれっ？．．．．水元コーチ！！？」

彩香は、いつの間にか観客席から消えてしまった晴人を探しながら独り言をつぶやいた。

泳ぎ終わった選手は、サブプールを使ってレースの疲れを取る為に泳ぐ『ダウン』を行う。晴人がサブプールに着くと、そこにはそのダウンも出来ずに座り込む4人の姿があった。晴人は4人を見つけると、ゆっくり歩み寄り、静かに声をかける。

晴人「みんな．．．．残念だったな．．．．」

気の使ったコメントも出来ず、とにかく一言言いたかった晴人は、ストレートにその言葉だけを伝えた。

沙羅「簡単に言わないで！！私達がどれだけこのレースに賭けてたと思ってるんですか？？」

八つ当たりにも思えるその台詞。その言葉は、今までの沙羅らしく力強く激しくもあったが、いつもとは違い涙に震えた悔しさも込められていた。

美月「ここで、切り替えたかったです．．．．ずっとベストが出なかったレースを、ここで終わらせたかったです。」

舞「みんなで気持ち揃えて、絶対ここではベスト出そうって．．．」

華「もうベストが出ないレースはやめようって……ここで全
て変えようって……」

全員が涙を流しながら晴人に訴えた。

『コーチにはついていけない』

その言葉は、ただやる気がないからではなく、コーチを信用できな
いから。それがしつかり伝わる紛れもないやる気を、その涙から感
じられた。ずっと戦い続けていた水泳、自分達なりに努力を続けて
きた水泳、それでもずっと結果が出せない大会が続いて……。そ
の結果で全てを壊されてしまったようで、4人はとまらない涙を流
し続けた。

沙羅「私達……もうダメかも……諦めちゃうかも……」

あれだけ強気で、負けん気があった沙羅が、始めてもらった弱気の
一言。その一言で、その場の空気が一瞬にして、誰も喋る事が出来
ない諦めの雰囲気へと変わった。

晴人「みんな……ジャンケンって知ってるよな？」

そんな空気の中押し黙る選手達の前で、晴人がいきなり『ジャンケ
ン』の話を始めた。

晴人「ジャンケン3回勝負！！1回負けて、2回目も負ける、だけ
ど3回目だけは勝った！！それでも2対1でジャンケンは負けた。
でもそれって本当に正しいと思うか？お前達はどう思う？」

涙目そのままに、わけもわからずただ晴人を見つめる4人。誰も答えないのを見ると晴人が続けて言った。

晴人「俺は違うと思うんだ。2回負けたって最後の3回目で勝ったんだ！！それなら、3回目に勝った人のほうが勝ちなんじゃないのか??」

意味もわからず、涙目を丸くさせる選手達。晴人は真剣な顔を作ると、そんな4人に、目と目を合わせて語った。

晴人「水泳ってそういうものだぞ……何回負けたっていいじゃないか！！本当に勝負したい、全国中学校がかかった最後のレース……そこで勝てればいいじゃないか！！今日、全国中学校のタイムを切ったって全国中学校に出られるわけじゃないんだろ！！？最後に……最後に笑えれば勝ちなんじゃないのか??」

確かな事を言っている、相違ないたとえ話。そして、その話を理解した選手達が、その言葉に引き付けられていく。

晴人「もし……もしまだ諦めずに……選手を続けて、全国目指す気持ちがあるなら……明日からの練習を俺にやらせてくれ！！俺は……何があっても、最後のジャンケンには勝たせてやるから！！！！」

それを言い切ると、もう一度しっかり女子選手一人ひとりと目を合わせあった。

1つのチーム

翌日、選手の練習時間。不安そうな顔でスタッフルームからプールサイドにつながる階段を下りようとする晴人。そんな晴人を心配した彩香が晴人に言った。

彩香「あの子達……来てますよ。」

彩香が言うあの子達とは、もちろん女子選手達の事。練習に来ているのはいつもの事。晴人は女子選手達が来るかどうかより、どんな態度をとるのが不安になっていたのだ。

プールサイドに降りると、男子選手達4人の前に立ち、気にかけている女子選手達をなるべく見ないようにしながらいつも通りの話を始めた。

晴人「よし！昨日はお疲れ様！！今日からまた練習が再スタートする！！気持ちを入れ変えて、頑張っていこうな！！」

いつもならそんな晴人を無視して泳ぎ始める女子選手達。それなのにこの日はなぜか、話をする晴人の方にゆっくり近づいてきた。

沙羅「コーチ！！」

いつもと変わらないきつい表情の沙羅。そんな沙羅の態度に、一瞬空気が凍りつく。

沙羅「……………今日から……………私達4人もお世話になります。」

女子4人「宜しく願います。」

あれだけコーチを信用しないと言い切り、自分達で何とかすると言っていた女子選手達が、4人揃って晴人に深く頭を下げた。全てを振り切って、プライドも捨てて・・・そんな強い意志がその言葉と態度から感じられた。それは晴人にとっては嬉しくも感じるが、大きなプレッシャーにも感じられた。

何があってもベストタイムを出したい・・・全国中学校に出場したい・・・それを叶える方法として選んだのが晴人に教わるという答え。そのプレッシャーを感じながらも、晴人は大きくうなずき気持ちを高ぶらせた。

晴人「よし！！今日からみんな1つのチームだ！！！！一緒に目指そう・・・インターハイと・・・全国中学校！！！！」

ばらばらでまとまりもなかった8人の選手達。その8人が一人のコーチと出会った事によって、ついに1つになる事ができた。彼らが目指すのは、インターハイと全国中学校。少しずつ1つ1つが改善され、目標に近付いていつているのが、誰の目からもわかった。

そんな選手コースのやり取りを、プールサイドが見えるのぞき窓から見下ろす一人の女性・・・その女性は、冷たく深い恨みが込められた目で睨んでいる。手に握るコブシは、怒りがこめられて震えがとまらない。そして、歯ぎしりのように歯と歯を噛みしめると、そつばを向くように後ろを振り返り、荒々しく歩き消えて行った。

その女性の行動は、これから起こる大きな問題の前兆をしっかりと表していた。

保護者のクレーム

夜の21時前、この日もいつも通りに水泳練習を終えた選手達が達成感ある顔でプールから上がってきた。

晴人「お疲れ様！！今日も良くやったなあー！！日に日に練習が良くなってるぞ！！」

あの日のレースから、もう2週間が経とうとしている。あれ以来、この日まで何も問題もなく順調に全てが進んでいた。

相変わらず毎日深夜まで仕事をし、休みの日は松山の元に水泳指導を教わりに行く。そんな身を削るような毎日を繰り返してはいたが、選手コースの変化が嬉しい晴人にとっては、そんなのはまったく苦にもならない慣れた日常へと変わっていた。

木島「水元！！！」

晴人が練習を終えた選手達に、練習についてなど簡単な注意をしていると、木島のきつい叫び声がプールに響き渡った。

木島「すぐに着替えてフロントまで行け！！お客さんがお呼びだ！！！」

『こんな時間に・・・いったい誰が俺を呼んでいるんだ??』そんな表情で首をかしげる晴人。その横で、何かに気づいたように身体をビクつかせ、顔をうつむかせる道春がいた。

晴人「お待たせしました・・・???どちら様ですか??」

まったく見覚えのないその女性。フロントまで顔を出した晴人は、不思議な顔でまたしても首をかしげた。そんな晴人の表情に気が付いた受付女性が、口横に手を当てながら小声で言った。

受付女性「あつ．．．．．選手の道春君のお母様だそうです．．．．．」

なんだか、場の悪さに気を使った言い方だ。

道春の母「あなたが最近来たっていう道春のコーチですね！！！！どーいう事なんですか、いったい！！！！」

晴人は、あらぶり受付のカウンターを両手で叩くその女性を見て、これがクレームだと言う事に気づかされた。

道春の母「こないだの大会！私も見に行かせて頂きました。みんないいタイムで泳げていたようですね？？」

当てつけがましいその言い方。それに晴人が、苦笑いで答える。

晴人「あつ．．．．．はい。おかげ様でいい結果も出たと思いますが．．．．．」

バン！！とまたしてもカウンターを両手で強く叩く道春の母。

道春の母「うちの子だけベストタイムが出ていないって言うのはどーいう事ですか！？他の子ばかりを見て、うちの子はちゃんと見ていないんじゃないですか？もしそうだとしたら、コーチが選手を無視しているって事ですよね？それはいじめという事になりますよ！

？大きな問題ですよ！？」

散弾銃の乱れ打ちのような母親の言葉。その怒りが収まらない母親の態度を見た晴人は、半笑いの妙な表情をしながら、両手で『まー』といったジェスチャーをとった。

晴人「とにかく落ち着いて下さいお母さん。そんな、全てがいつもいいなんて事はないですから・・・道春君だってもちろん頑張っていましたし、ベストじゃないにしても、それなりにいいタイムは出していましたから・・・」

道春の母「何を言っているんですか？道春が悪いわけではないじゃないですか！！あなたは道春のせいにするんですか？？」

もうまったく意味不明で会話にならない返答。人の言っている事も理解できず理不尽さ丸出した。そんな揉め事を起こしているフロントをスタッフルームから除く店長と彩香の2人。

店長「ふゝ・・・またあのお母さんが・・・」

彩香「???・・・よくあるんですか？こーいう事。」

店長「ああ・・・有名なクレーマーだよ。属に言う、モンスターペアレントってやつだな」

『モンスターペアレント』

子を持つ親の過保護さが悪化して、理不尽な理由でクレームをいう保護者に対して使われる言葉だ。『自分が正しい』という勘違いや思い込みから起こるクレーム。

道春母「とにかく！納得いく説明がなければ、『コーチが選手をいじめている！』という内容で、おたくの本社まで話を通して頂きます！！いいですね！！」

晴人「いやいやお母さん・・・・・・・・それは大きな勘違いですから・・・・・・・・」

そんな晴人の言葉などには耳も傾けず、道春の母は後ろを振り返りすたすたと歩いて行ってしまった。

その後姿を腕組した悩ましい表情で見送る晴人は、深いため息だけを静かにこぼした。

深刻な事態

店長「本社クレームはまずいぞ。」

スタッフルームで椅子に座り話す店長は、いつになく優しく落ち着いていた。

店長「いままで何度となくクレームを言ってきたいるお母さんだ。自分も含めてだが、過去何人ものスタッフがあの人からのクレームを受けている。だが、誰がなんと言おうがあの人には納得をしてくれない。」

店長の前に立つ晴人が、シュンツと縮こまるように肩を落とす。

店長「さっきの捨て台詞の通りの内容で本社クレームがいつてしまえば、間違いなくお前には選手コースを降りてもらう。そして場合によっては……会社も辞めてもらう事になるだろう。」

声は漏らさず、『えっ??』という驚きの態度を表情だけで見せる晴人。ここにきて、やっと事の重大さに気づかされたようだ。

彩香「そんな……それはあまりにも酷くないですか??店長だって分かってますよね??道春君をいじめてるなんて……水元コーチの指導中、そんな場面がありましたか??」

店長は腕組みをすると、思い返し考えるように答えた。

店長「はっきり言って、今回の一件については……向こうが悪いだろうな。水元にそんないじめするような態度はまったく見受けら

れなかった。」

初めて聞いた店長からの味方ととれる優しい言葉。その言葉を聞いた晴人は、今までにない信頼の笑顔を分かりやすく作った。それを見ると、店長はまたキツとしたきつい表情を作る。

店長「ただし！！結局は選手に熱くなりすぎたお前が悪いんだ！！そこまで本気でやるなら最後まで責任を持て！！正直、本社クレームまでいってしまえば立场上、私にも何らかの罰則が科せられてしまっただろうしな！」

結局自分の事しか考えていない店長の言葉。晴人はそれを聞いて、すぐにその笑顔をまた真剣な顔に変えた。

あまりにも理不尽すぎるそのクレーム。その対処法など、到底晴人には見つからなかった。それでも、選手の保護者がここまで間違った見解に辿りついてしまうのには、自分にも責任がある。そう感じた晴人は、信じられない言葉を店長に発した。

晴人「わかりました。自分が責任を持って納得をさせます。そしてもし、本社にクレームが行くようなことがあったら……責任をとって、自分はこの仕事をやめさせて頂きます。」

彩香「ちよつと！！何を言ってるんですか水元コーチ！！やめる必要なんてありませんよ！！」

あまりにも大胆すぎる晴人のその答え。クレームや店長の態度によって苛立った晴人が、勢いで口にしてしまった売り言葉買い言葉なのは言うまでもない。それでも、晴人はその言葉を訂正する事もなく強い態度で店長を見つめ続けた。

机に向かい仕事をする振りをしながらずっと聞き耳を立てていた木島。店長のほうに顔を向けると、『にやっ』と口先だけを上にあげる表情で合図を送った。それに答えるように店長は木島に向かって微笑みながら軽く顔をうなずかせた。

晴人と彩香

彩香「水元コーチ！あんな事言ってほんとに本社クレームになってしまったらどうするんですか？！」

わだかまりたつぷりのその内容にいつになく興奮をする彩香。スタッフルームを抜けた彩香と晴人は、別室に入りそのいきさつについてもう一度話しを始めた。

晴人「わからない……でも、道春がベストを出していなかったのは確かだし……結局俺が悪いと思える部分もあるし……」

彩香「水元コーチは何も悪くない！！絶対おかしいですよ！！」

選手コースもまったくうまくいかず、問題も多くて……やつと軌道に乗り始めたと思ったら、また大きな問題が起きてしまつて……そんな事態に対して弱気になり落ち込んでしまった晴人は、涙目を浮かべながら語りだした。

晴人「いつも……こんな俺の味方になってくれてありがとう……
……彩香コーチの存在は大きいです。助かってますよ……」

男女の友情はないとも言われているが、年齢差もあるこの二人には恋愛感情でも上下関係でもない特別な友情が芽生えていた。彩香が唯一の晴人の支え……そんな大きな存在になっていたのだ。晴人のそんな気持ちを察したのか、大きくうなずき強い眼差しを送り返す彩香。そして、自信たっぷりな笑顔で晴人を安心させるように言った。

彩香「大丈夫です。味方は私だけじゃないですよ。もう……選手達だって分かってくれているはず……明日、直接道春君と話をしましょう。」

今日まで一度も文句を言わずに晴人の練習を続けてきた道春。もう晴人とは堅い信頼関係が築けているはず。母親が納得しないのであれば息子の道春を納得させる。彩香が思うその気持ち。その彩香の考えが理解できていた晴人だが、正直まだ不安が隠しきれない。そんな晴人は自信のない表情のまま、うなずくだけの返事を静かに返した。

道春との話し合い

次の日……晴人は選手の練習を始めると、すぐに泳ぐ道春を止めプールサイドに上がらせた。

そして、道春を自分の前に立たせると、弱気になっていた気持ちをもう一度叩き起こすように大きな深呼吸をした。

晴人「道春……昨日、お前のお母さんがプールまで来た。それは知ってるか？」

道春は声も出さず、晴人の顔も見ず、うつむき下を見たまま静かにうなずいた。

晴人「何を言いに来たのかも知っているよな？」

またゆっくりとうなずく道春。そのまま、焦らずに一つ一つの内容を順追って進めていく晴人。

晴人「まず、その事に対して道春がどう思っているのかを聞きたい。そこら辺はどうなんだ？」

晴人には自信があつた。ずっと自分の練習を素直に続けてくれている道春。彩香の言うとおり選手も絶対に自分の味方になってくれる！絶対に信頼関係を築けている！！そんな強い自信があつたのだ。

道春「………わかりません。」

味方になってくれると思っていた道春の予想外な返事。その返答を聞いた晴人は、道春の奥底にあるその思い悩む気持ちをすぐに見抜

いた。

晴人「お前はいつも引っ込み思案で自分を出せないでいる。もっともっと自分の気持ちを出して、表現していいんだぞ！！わからないなんてことはないだろ？自分の気持ちを正直に言ってみろ！！」

少しきつめな言い方だが、もう数ヶ月も一緒にいる教え子だ。その性格も考え方も晴人には理解できている。だからこそそのきつめな言い方だ。

道春「僕……お母さんをけなしたくないし……お母さん好きだから味方でいたい……でも水元コーチも信じています。」

優柔不断というか、はっきりしないというか、そんななよなよした態度で自分を主張できない道春。その姿を見て、晴人は更に強い言い方で怒鳴った。

晴人「道春はもう高校3年生だぞ！！そんなんだからマザコンなんて言われてしまうんだ！！いつまでもお母さんお母さん言っただけで、自分で行動して自分で決めろ！！」

なんだか話す内容が少しそれていっているように感じる。それでもその内容は、道春を水泳選手として成長させる為には絶対に必要な事でもあった。

弱すぎる道春の性格。そんな弱気で自分を出せない選手が結果を出せるとは思えない。トップスイマー達は、皆強い意志と精神を兼ね備えている。

晴人「もつと自分を強く持て！！こないだのレースで結果が出なかったのは、その性格にも理由があるのかもしれないぞ。道春にとつて変えるのは、練習に取り組む姿勢でも泳ぎの形でもない、性格だ。速くなる為にも………目標・意思を強く出せる性格になれ！！」

晴人のストレートな言葉。それを聞いてももじもじしたまま、また弱さを見せる道春。晴人は大きなため息をつく、軽く目を瞑り、残念そうに首を横に振った。

晴人「お母さんとの一件、それを解決する為に道春の力を借りようと思ったが………そんなんじや無理だな。後日、お母さんに会いに道春の家へ行く事にする。わかったか？」

『一度自分から母に話をさせて下さい！』そんな男らしい前向きな意見を期待した最後の賭けのような晴人の台詞だった。が、道春はそれを聞いても何も反応をせず、拳動不審にまで見える動きで小さく会釈をすると、すぐにプールに入り練習に戻ってしまった。

晴人はその姿を最後まで見送ると、『やれやれ………』といった小さなため息をついた。

本当の理由

晴人「よし！明日の練習はオフ、休みだ。しっかり休んで、また来週からの練習に集中するように！！」

練習終わりの挨拶。それを終えると、練習に疲れた選手達が水泳道具を片し、帰り支度を始めた。みんなが更衣室に向かい始めるその時、道春がいなくなるのを見届けると、深刻な顔をした拓也が迷うようにゆっくり晴人に近づいてきた。

拓也「水元コーチ・・・・・・・・話があるんですけど・・・・・・・・」

拓也の思い悩んだその表情。それを見た晴人は、また別の新しいトラブルかと思い、恐怖心で怯えた顔を作った。

拓也「道春は、マザコンなんかじゃありません！！」

大きな問題を言われる事を身構えていた晴人は、拍子抜けのような安心感を笑顔で表現した。

晴人「なっ・・・・・・・・なんだよ拓也！別に俺は道春をマザコンだなんて疑ってないぞ！」

その晴人のあっさりした返答を聞き、拓也がまた更に深刻な表情に変えた。

拓也「昨日あった道春のお母さんからのクレーム。みんな知ってますよ。」

それを聞き、すぐに晴人も真剣な顔に表情を切り替えた。

拓也「この問題、そんな簡単な理由が原因じゃないんです。」

拓也が言う簡単な理由、それは『道春のマザコン』。何かを知っているようなその言い方に、晴人は釘いるように問い詰めた。

晴人「よかったら、話を聞かせてくれないか？」

拓也は、目線を下に落とし、言いづらそうな表情を作る。それでも、何とかその重たい口を開いた。

拓也「道春の家、片親なんです。父親は道春が小学校の頃に事故で他界しています・・・親一人子一人の家庭環境なんですよ。だから、道春は人が引いてしまうくらいの母親っ子なんです。お母さんも、必要以上に思えるほど道春の事を大切にしている・・・でもそれって、2人しかない家族なんだから当たり前のことなんじゃないですか？」

拓也は目線をまた晴人に戻し、力強い涙目で訴えた。

拓也「水元コーチ！！何とかこの問題・・・解決してやって下さい！！！！」

自分の為の問題解決。最初は、会社を辞めさせられるという恐怖心から、そんな自分の為という気持ちだけが大きかった。それでもそうではないのだと気づかされる拓也の言葉。2人の家族の為の問題解決。単純にマザコンだからとか、モンスターペアレントだからとか、そんな言葉で片付けてはいけない。拓也が伝えたその言葉を聞き、晴人の気持ちは大きな変化をし始めていた。

母の想い

彩香「そうだったんですか……複雑な家庭環境で子供がグレちゃったりもするけど、親の性格にも問題が出てしまう事もあるのかもしれないね。子供を思うあまりに間違った愛情表現になっちゃったり、今回のように過保護さが悪化して理不尽な事を言う性格になってしまったり……」

ファミリーレストランで食事をしながらの彩香の見解。

その正面に座る晴人が、もっているドリンクのグラスを静かにテーブルに置いた。

晴人「もう、本社クレームがどうだとか、そんな事はどうでもよくなってきた。苦しい家庭環境が作り上げたモンスターペアレント。あのお母さんがただただ悪いのではないのかもしれない。なんだかあの2人の為にも、この問題を解決してあげたく思えてきたよ。そんな辛い家庭環境にしながら幼少の頃からずっと水泳を続けてきたんだ……絶対にすべてを解決して、水泳でもいい結果を出してあげたい……」

自然とテーブルに置いたグラスを握り締め、カタカタと震えるほどに興奮をしていた。

彩香「あっ……そう言えば私。道春君のお母さんが働いているお店の場所、知ってますよ!!」

翌日、晴人は小さなノートの切れ端に書かれた彩香の地図を見ながら、その場所をうろつくと探していた。

晴人「あっ……あつた！！ここか……」

晴人が見上げるその店、そこはよくある地方のスーパー的なお店だった。自動ドアをくぐると、売られている食材や商品などには目もくれず、定員を見渡しその女性を探し始めた。

晴人「あっ……」

気づくように見つけたその女性、道春のお母さんだ。

晴人「お久しぶりですお母さん。」

お弁当を並べている手を止めると、はつとした表情で晴人に気がつく。そしてすぐに、表情を変え、怒りをあらわに睨みつけた。

道春の母「何しに来たんですか？？今仕事中ですよ！！」

晴人は周りを見渡し、その場の悪い空気を察した。

晴人「お話があるので、外でお待ちしています。」

それから数時間。夜になり私服に着替えた道春の母が店内から出てきた。明らかに気づいているのにわざとらしく、その晴人の横を素通りする。

晴人「ちよっ……すみません。少しだけ……少しだけ時間を下さい。」

道春の母はすばやい動きで振り返ると、足早な言葉だけを言い放つ。

道春の母「あなたとお話しする内容はもうありません！！！」

きっぱりと言い切る道春の母。それを聞いた晴人が、なぜか今度は優しい笑顔を作り道春の母に言った。

晴人「10数年、休みなくずっと同じ職場で仕事を続けて、毎日道春君のプールを送り迎えする。真面目で努力家なんですね・・・お母さんは。」

道春の母「は？何を言ってるんですかあなたは？とにかく忙しいのでもう行きます！」

晴人「そうやって、我が強くて、まっすぐな所もすごくいい所なのかもしれないね。」

変わらず笑顔の、晴人の言葉。そんな態度にいらつとしたのか、道春の母が更に激しく撒き散らすように怒鳴った。

道春の母「いい加減にしてください！！何の用なんですか！？」

それにも動じないで、笑顔を崩さずまっすぐ道春の母を見続ける。

晴人「人のいい所を探すんです。悪い所じゃなくていい所を。悪い部分は誰でもすぐに見つける事が出来る。でもね・・・いい所って見つけようって努力しないと見えてこないんですよ。」

プールで言ったあのクレーム。その事を話されると思っていた道春

の母は、わけもわからず不思議そうに首をかしげた。

晴人「まだ一度しか会っていないので失礼だとは思いますが、あなたの悪い所はいくらでも見つける事が出来ます。理不尽な態度、度がすぎたクレーム、人の話も聞けないし、全て自分が正しいと思い込んでしまう。」

道春の母「何なんですかい！何がいいたいんですか？」

晴人「いい所を探しているうちに・・・それには理由があるってわかったんです。あのクレームには深い理由があるって事が・・・」

晴人は押し黙る道春の母を見ながら、優しく包み込むように話し始めた。

晴人「家庭環境による寂しさ・・・かまってほしいという気持ち。女手一つで育てた息子への思い。そして・・・ずっと続けてきた水泳への強い気持ち、それだけの気持ちがあるからこそ結果を求めてしまう。その気持ち、本当に良くわかります。」

そんな晴人の優しい言葉に、黙り続けていた道春の母が涙を流した。そしてついに、心の奥にたまっていた本心をあらわにした。

道春の母「そんな簡単な一言で言わないで！何がわかるって言うんですか？そんな一言で言い切れるほど、楽なものじゃなかったんだから！！！」

辛い日々を過ごしてきた母。そのシングルマザーとしての努力は、簡単な一言では言い表せないものだったのだろう。

そんな叫びを見せた道春の母は、その怒鳴った叫びで楽になったのか、気持ちに落ち着きを取り戻し始めた。そして、涙を流しながらその続きをゆつくりと語り始めた。

道春母「父親が他界してから10数年、何があっても道春には水泳を続けてほしかった。だからどんなに忙しくても送り迎えだって毎日続けられたし、金銭面で苦しくてもプールを続けるお金だけは払えるようにしていた。何でそこまでして水泳にこだわり続けていたかわかる??」

答えられない晴人を見ると、更なる涙声で訴えた。

道春母「それが……3人の願いだったからよ!!!……
・幸せだった親子3人での生活……そこにはいつも道春の水泳があつた。道春が選手コースに入って……夢が広がって……3人の気持ちは水泳で1つになれたの!特に……あの人の水泳への気持ちは強かった……道春をオリンピックに行くかせるって。大きすぎる夢でバカげていると思うかもしれない、けど……私たち親子3人は、その気持ちで幸せな笑顔の家庭を築けていたのよ!!!」

人目も気にせず路上で座り込む。そして、両手を地べたにつけると涙をこぼしながら叫んだ。

道春母「道春が水泳を続ける事で……今でも3人が1つになれる!!!そう思えるの!!!……道春には結果を出してほしい……それがあの人の願いだから……」

拓也が言った『この問題はそんな簡単な理由ではない』。それには、拓也や晴人が感じていたそれよりも、重く深い理由が隠されていた。

家族にしかわからないその思い．．．．．そこにある母と道春の父への思いを、道春の水泳でしつかりと形にしていたのだ。

晴人「．．．．この問題．．．．解決させる方法が絶対にあるはずです。それは、わたしとあなただけでは話をつけられない。」

睨むように道春の母を見る。

晴人「明日の夜、またうちの職場に必ず来てください。3人で話し合います。」

残りの一人は選手の道春。その気持ちを伝えると、後ろを振り返りその場を後にした。

父の願い

次の日、練習を終えるとすぐにフロント横のカウンター席にある椅子に座り、2人を待ち続けた。練習前も練習中も練習の後も、一度も道春とは話を交わしていなかった。一抹の不安……話し合いに応じてくれるのか、来てくれるのか……

入り口の自動ドアが開くと道春とそのお母さんが姿を現した。颯爽とすたすた歩く母、フロントのカウンター席まで行くと、そのまま晴人の正面の椅子に堂々と腰を下ろした。

道春の母「納得がいく返答がなければ、明日本社に問い合わせさせていただきます！」

その態度は、昨日のやり取りから一日経って自分の理性を取り戻したのか、なんだかまた以前のクレーマーそのものに戻っているように見えた。

晴人「わかっています。まずは、道春君と話をさせて下さい。」

昨日の続きを……。そんな展開で話を進めたかったが、あまりにもあっさり昨日のやり取りをリセットしてしまっている母親を見て、仕切りなおすように道春と会話を始めた。

晴人「道春、昨日お母さんから色々な話を聞いたよ。家庭の事、お父さんの事、水泳の事……。道春が今、どんな気持ちで水泳を続けているのか……。聞かせてくれないか？」

母親を納得させて、和解する。それにはただただ母親が言う『なぜ

ベストが出なかったか』や『道春をいじめている』などに対する弁解や言い争いをしていても無駄だと晴人はわかっていた。昨日のよう、もっともつと2人の中に入り込んで、その奥底にある問題を解決していくしか方法はないと思えたのだ。

その糸口の入り口として選んだのが、『道春の水泳に対する気持ち』。

道春「僕は……わからないです。」

カウンターテーブルを強く叩くと晴人が叫んだ。

晴人「いつまでもわからないわかないで話を終わらせるな!!」

道春母「ちよつと!!道春を責めないで下さい!!やっぱりいじめているんじゃないですか!!」

興奮する晴人は目線を母親に移し、厳しく答えた。

晴人「守るだけが教育じゃない!!それだけじゃ行き過ぎた過保護で終わってしまいます!!道春には父親がいないんだ!!父親のよくに間違った事を正す事も必要なんじゃないですか??それがあなたには足りないんだ!!」

クレームを受けている側なのに、説教のように叫ぶ晴人。スタッフルームでは心配そうに見つめる彩香と、『あゝあ……やっちゃったよ……』と言った表情で見つめる店長と木島の姿が見えた。

晴人「道春!そんな態度で水泳を続ける事を、親父は望んじやないぞ……」

道春「僕は！……」

その晴人の言葉には、瞬時に反応する道春。

道春「僕は……3人が1つになれる水泳を続けたい。お父さんが好きだから……お母さんが好きだから……そして何よりも、水泳が好きだから。」

答える道春の姿を見て涙ぐむ母親。

道春母「質問する必要なんてないのよ！！当たり前じゃない！！私たちは水泳で一緒になれるのよ！！水泳で家族を築けるのよ！！だから、タイムが出なければコーチに文句だって言うわ！！結果が出なければクレームだって言いつけるわ！！そうすれば、もっともっと道春を見てくれるし、速くもさせてくれるんでしょ??」

晴人「それは間違っています！！あなたはそれで道春を守っているつもりでいるだけです！！道春の為に出来ているつもりでいるだけです！！そんな事をしても道春君は速くはならない！！道春君自体を変えてあげないと……タイムなんて変わりません！！」

道春母「道春の何を変えれば速くなるって言うんですか??速くならないのを道春のせいにするんですか??」

晴人「お前は黙ってろ！！」

ついに我慢の限界に来た晴人は、お客さんの親であるクレーマーを相手に、暴言のような発言をしてしまった。

木島「うわっ……もう終わりだあいつ……」

小声でうれしそうに言う木島。それに苛立ち、ひそひそ声で彩香が叱った。

彩香「黙っててください！」

晴人「道春……道春が速くなってくれるのを誰よりもお前の父親が願っていた。親父が言っていて『道春をオリンピックに行くかせる……』その話をする時の親父の顔を覚えているか？」

道春は涙をこぼし、その時の父親の顔を想像するかのようになんて答えた。

道春「うれしそうな……顔でした。僕が覚えているお父さんの顔の中で、一番好きな顔です。」

晴人「親父の為に速くならなきゃいけないんだ……オリンピックなんてまだまだ程遠いけど……みんなで目指すインターハイ……何があってもベストタイムを出して結果につなげなければならぬ。」

もう一度強い眼差しで道春を見ると、問いかけた。

晴人「道春……お前が速くなる為に今必要なのは……母親のクレームか？もつと熱い俺の指導か？それとも……前向きになって、自分の気持ちを出せるようになるお前か？どれだと思う？」

それでもまだ、何も言えない道春。

晴人「いつまでも母親に頼るな！！俺のやり方に頼るな！！人に動

かされて結果を出す水泳なんか親父は望んじやいないんだよ！！お前の気持ちで・・・お前の力で結果を出す。そんな姿を親父は見たいんじゃないのか？成長したお前の姿を・・・亡くなったお父さんに見せてはくれないか？」

静まり返るその場。道春はその一瞬の瞬間に色々な事を考え、思い・・・目を大きく見開くと座っていた椅子を後ろに倒しながら素早く立ち上がった。そして、横にいる母親にゆっくり目を向ける。

道春「お母さん・・・インターハイ最終予選の3カ月後まで・・・文句を言わず、僕の自由にやらせてくれ！！お父さんに結果を見せる僕の姿を、お母さんが作るんじゃないくて、僕が作りたいんだ・・・」

道春の母「・・・道春・・・」

道春がやっと見せた自分の気持ち。その姿を見た晴人は、『もう大丈夫！』といった大きなうなずきを見せると立ち上がり母親に向かって自信たつぷりの表情をした。

晴人「家族の夢へ向けた残りの3ヶ月間、自分に任せてはくれませんか？絶対に・・・結果を出す約束しますから。」

強い眼力と自信ある言い方。それを聞いた道春の母は、もう大泣きというくらいの涙をこぼしながら晴人を見た。

道春母「死んだ父にも・・・約束してくれますか・・・？」

その一言に感じる、母親の想い。それをかみ締めるように晴人は大げさなほど力強くうなずいた。

晴人「約束をします。」

晴人の姿をまっすぐ見つめると、亡くなった夫を思い返しなが
ら、
ゆっくりとつぶやいた。

道春母「……………道春を……………宜しく願います。」

モンスターペアレントと言われるほどまで続けてきた理不尽なクレ
ームの数々。毎日働き忙しい中、それでも続けてきた水泳。ずっと
守り続けた道春。その肩の荷を全て降ろすような母親としての心の
こもった言葉だった。

トラブルの予感

季節は春、男子選手4人も高校3年生を迎えた。近づく最後の夏・・・それに向けた練習はよりハードに、激しさを増していた。

翔太「やべえ・・・次もたねえよ・・・」

スピードの持久力を上げる為、1本1本を全力で泳ぐというハードな練習。100m20本と言う本数の多さと、インターバルの短さに翔太がきつい表情で根を上げる。

道春「バカ！！遅くてもいいから今の力、全部を出すんだよ！！」

その目は、悩みも弱気も感じないまっすぐな目をしていた。

親子の絆、あの一件から大きく変わった道春は、自分から追い込む姿勢を完全に見につけていた。晴人はそんなやる気ある道春に気づくと、笑顔で翔太を強く煽った。

晴人「翔太！！次、行くぞ！！よい・・・ハイ！！！」

晴人は練習を終えると、達成感あるため息をつきながら選手達に言う。

晴人「よし・・・ダウン行つていいぞ・・・」

練習後のケア。ゆっくり身体を休めながら泳ぐそのダウン。次の日に疲れを残さない為にも必要な大切な時間だ。そんなダウンをゆっくり各自で始めていると一人の中年男性が、まだ選手が泳いでいる

そのコースに勢いよく入ってきた。

晴人「あっ……すみません。まだ選手のダウンがあるので……」

練習が終わったと勘違いしてプールに入ってきたと思った晴人は、すぐにその男性に近づき優しく言い伝えた。それを聞くと、あまりにもオーバーリアクションな水を叩くジェスチャーで怒りを表す男性。

大久保「何時まで何コースも使っているんだ!!こっちだってプール使いたいんだから!!早くどけるよ!!」

毎日行われる選手の練習。6コースの内、2コースを常に夕方2時間も使っている。残りの4コースを使って、いわゆるフィットネスといった、大人のフリーコースが設けられていた。

大人の会員数が多いこのスポーツクラブ。いつも大人のフリーコースには、4コースでは足りないくらいの人数の人でひしめき合っていた。

晴人「すみません。すぐに終わらせますから……」

その空気を読んだ晴人は、あわてて選手達を指示するアピールをした。

晴人「おーい!!早くダウン終わらせろ!!」

その声を聞いて渋々といった表情でプールのスタート側に集まる選手達。

沙羅「何ですか？コーチ。」

晴人「ほら大人の人が早くこのコース使いたいって言うてるから・・・すぐにダウン終わらせて上げれ！！」

見るとそこにはまだ、そのコースから上がらずに、スタート側で選手が上がるのをイライラと待っている男性がいた。その男性に気を使っての選手への一言だった。それを横で聞いた翔太が馬鹿にするような言い方で言い放った。

翔太「そんな・・・早くダウンしろって、それじゃダウンの意味がないじゃないですか！！こっちは大人と違って、2時間で7千も8千も泳いでいるんですよ？ダウンくらいゆっくりさせて下さいよ！！」

横でイライラしている大人への当て付けのように、その男性をチラ見しながらの言動。それに気が付いた男性は、キツとした睨む目で翔太を見ると、何も言わずにゴーグルをつけ、泳ぎ始めた。

翔太「なんだよ！あの態度！！」

翔太は、よりむかつきを表情に出し、泳ぐその男性を睨み返した。

そのやり取りを、プールサイドで見つめる晴人と彩香。

彩香「大久保さんって言うんですよ、あの会員さん。気をつけてくださいね。こないだの道春君のお母さん並のクレーマーですから。」

黙々と自己流の泳ぎで水しぶきを上げるその男性を見ながら、晴人はまた何やらアクシデントの前兆のような空気を感じた。

翔太と大久保の衝突

翌日の練習。晴人はいつも通り6時30分になると、プールサイドに集まった選手達の前に歩き寄った。すると、男子選手の拓也が、プールを指差しながら一言つぶやいた。

拓也「水元コーチ。誰か泳いでいますよ……………」

6時30分までは、小学生のスクール生が泳ぐ時間。その時間を過ぎると、選手と大人のフィットネス会員が泳ぐ時間になっている。小学生がまだ泳いでいるなんて事はないはず、他の誰かが泳いでいるなんて事もないだろうと晴人がプールを見ると……………そこには、昨日選手コースに文句を言ってきた大久保が我が物顔で泳いでいるのが見えた。

翼「大人が泳ぐコースは、向こうの4コースですよね？」

いつもは大勢のフィットネス会員でこったがいしているプール。時間も早いこの時間は、残りの4コースもまだガラガラの状態だ。それでもその4コースを無視して、大久保は選手コースへの挑戦状のように、あえて選手がいつも使っている残りのコースを使って泳いでいた。

翔太「何だよあいつ……………昨日の大人だろ??関係ねーよ。アップ始めようぜ!」

翔太はそう言うと、そのフィットネス会員が泳ぐコースに飛び込み、その挑戦を買って出るようにいつもより激しい泳ぎでウォーミングアップを始めた。

晴人「おい！！翔太！ちよつと待て！！」

プールに飛び込み泳ぐ翔太には、そんな晴人の言葉はもう届かない。一直線に大久保に向かって泳ぎ進む。右側通行がプール利用のルール。それは、選手でもフィットネスでも同じだった。それを無視するように、翔太はまっすぐ中央を泳ぎ進んでいった。

バン！！！！

交差するクロールの手と手、それがすれ違う瞬間に激しくぶつかり合う。狙っていたかのような翔太の仕業だ。プールの中央で動きを止めた2人は、予想通りの言い争いを始めた。

大久保「いたっ・・・・・・・・いたたた・・・・・・・・」

大げさに腕を抱え込み、その事態をアピールする大久保。

大久保「なんだね君は？怪我でもしたらどーするんだ？？」

大久保は翔太を睨み、腕をさすりながら言った。それに答える翔太は、まったく悪気もなく反省も感じない強気な態度。

翔太「俺達が泳ぐコースで、勝手に泳いでいるあんたが悪いんだろ！！！！」

大久保はさする腕を払いのけると身体を翔太に近づけ、喧嘩前を思わせるような態度を示した。

大久保「何？？俺達のコースだあ？？ここはみんなのプールなんだ

よ！！そのプールを使わせてあげているのは、私達大人の会員だろ？」

冷静な大人らしさと、こんな若造になめられるかと言う強気な態度。それにも動じない翔太は、若者らしい負けん気で食って掛かる。

翔太「何？俺達はあると違って、本気で水泳やってるんだよ！あんたらは向こうで楽しく、無理ない健康的な水泳をやっているだけだよ！！？」

大久保「なんだその態度は！！それが大人に対する態度か？？プールを貸してもらっている立場を君達はわかってるのか！！？」

翔太「俺達が目指している水泳は！あんたらとは違うんだよ！！！」

明らかにお互いの言い分がぶつかり合っているその状況。伝えたい事がお互いに分かり合っていない。その状況の深刻さに居ても立ってもいらなくなつた晴人は、服を着たままプールに飛び込み2人に駆け寄り割って入った。

晴人「落ち着いて下さい大久保さん！！翔太も落ち着け！！！」

それでも睨みある2人の目と目。お互いに自分の言い分を譲らないその姿勢を見て、晴人は何も出来ず、首を振るように繰り返し2人を見続けた。

昔の教育と今の教育

何とか落ち着きを取り戻した2人をプールサイドに上がらせる晴人。翔太が、プールの奥の隅でふてくされた様に座り込んだ。大久保は、プールに用意してある、大人のお客さん用のプラスチックで出来た肘掛け椅子に、腰をかけ晴人と話合いを始めた。

大久保「結局、あなたの教育がなっていないんじゃないですか？」

お客と定員、そんなラインを利用した説教じみた大久保の態度。そんな大久保の言葉には、もちろん言い訳も弁解も出来ない晴人。

晴人「すみません。教育はしているのですが・・・・・・・・・・本当に申し訳ございません。」

とにかく平謝り。そんな晴人の態度を見て、大久保が調子に乗るように続けて言い放った。

大久保「だいたいね・・・・・・・・今回の件をなくしても、いつも彼らを見ていて思っていたんだよ！！練習前の態度・・・・・・・・練習中の態度・・・・・・・・練習後の態度、全てに礼儀が感じられない！！」

晴人「もちろん私としても、泳ぐだけではなく『しつけ』もしつかりしていいこうと思っっているんですが・・・・・・・・今の子はなかなかうまく行かなくて・・・・・・・・」

相手の話に合わるような態度で大久保を落ち着かせる。それでも納得がいかない大久保は、変わらず激しく文句を言い続けた。

大久保「それじゃあ彼のあの態度はなんだね？ふてくされて座り込んでいるじゃないか！あんたも教育者ならね！私に謝るより先に、彼の所に行つて首根っこ捕まえて私の前に突き出し、彼に謝らせるべきなんだよ！！そういう基本的な教育も出来ないのに、ちゃんとした水泳指導なんて出来るんですかね？？！」

さすがにその発言には、イラッとした晴人。少しだけ相手をご馬鹿にするような発言をする。

晴人「そんな首根っこ捕まえるなんて・・・相手を理解させた上で誤る行動を起こさせないと、教育なんて出来ないんじゃないですかね・・・・・・・・」

反抗的な晴人の態度。その態度を瞬時に察知した大久保は、収まり始めたその気持ちをまた荒々しく震わせ晴人にぶつけた。

大久保「なんだねその態度は！！それが出来ないからこんな事態になっているんじゃないのか！！だいたい学校にしろ何にしろ、最近の教育は甘すぎるんだよ！！そんな甘い教育をしてるから、過保護な親や、甘えすぎの子供が増えるんだ！！！」

晴人は、一瞬だけ道春を見つめるとあの時のトラブルを思い出した。それでも、改善された道春を思い、また大久保に向き直つて言った。

晴人「それが今の教育なんです！！暴言や力だけで押し付ける教育は、もう今の時代は教育とは言わないんですよ！！！」

睨みあふ晴人と大久保の目と目。大久保はその目をそらし椅子から立つと、小さな声で『ふ・・・・・・・・』というため息をついた。すると、もう熱くけんかをするのも馬鹿らしいと思ったのか、落ち着いた態

度に変えプールに向かい歩き始めた。

大久保「俺が子供の頃は・・・あんな態度する奴は引っぱたいて、引きずりまわされていたけどな。」

晴人「もう時代が違うんです。今の時代、学校の先生でも水泳コーチでも子供に手を上げたら首になりますよ。」

その言葉を聞くと、プールに向かう足を止め晴人にまた目を向けた。その目は、さっきまでの苛立ちがうそのような、驚くほど落ち着いた優しい目をしていた。

大久保「人と人とのつながり・・・それが薄れてしまっているから、手を上げるだけで文句も言われ、問題になっってしまうんじゃないですかね・・・あなたも、あの選手との信頼関係に不安があるから手を上げる事ができないんじゃないですか？」

それを伝えると、またプールの方を向き歩き、中に入り泳ぎ始めた。

なんだか何かを伝えたいような・・・そんな態度の大久保だったが、泳ぐそのコースはやはりいつも選手が使っているそのコース。それを見た沙羅が、投げやりのような言い方で晴人に言った。

沙羅「・・・どーするんですか？結局うちのコースで泳いでいるじゃないですか！！1コースしかあいてないですよ。」

そんな沙羅を見た晴人は、選手の前で笑顔を作ると、心を通わすように言った。

晴人「仕方ない！今日は我慢して1コースで練習しよう！！」

それを聞いた選手達が、愚痴るように言う。

美月「え???1コースで8人泳ぐの???さすがに狭すぎませんか?」
「.....?」

翼「まったく自分勝手だよな.....誰様なんだよあの人は.....」
「」

拓也「明日はあの人が来る前に、練習を始めちゃおうぜ!!」

そんなみんなの声を聞いて、座り込んでいた翔太は立ち上がるとプールに飛び込み、みんなを睨みながら言った。

翔太「明日も同じような態度されたら、今度こそ俺がバシッとどけてやるよ!!」

沙羅「宜しく頼みます!!頼りになりますね翔太さん!!!」

晴人はそんな会話を笑顔でする選手達をプールサイドから見ながら、なんだか少し大久保の言っている事も正しいような、思い迷う複雑な気持ちになっていた。

対処法

木島「あゝあ・・・！大久保さんと問題起こすなんて・・・もうどうしようもないな！昭和の堅物だから、あの人は！今更、『平成を理解しろ！』なんて言っても、無理な話だよ！！」

スタッフルームであざ笑うような言い方で晴人を馬鹿にする木島。それでも的を得すぎているその発言に、晴人は押し黙り自分の机に座りうつむいた。

木島「今回はさすがにうまくは行かないぞ！大久保さんは、あの道春のお母さんをより厳格にしたようなクレーマーだからな！」

木島は、そう言いながら晴人の肩をポンポンと軽く叩いた。

彩香「明日も・・・同じですかね・・・」

今日だけで済めば、まだたいした事態にはならないで収まってくれるだろう。これと同じ状況が毎日続けば、きつともっとひどい衝突になってしまう。それを予想しての彩香のつぶやきだった。

木島「さあ水元！！どーやって、あの堅物に『平成』を理解させるのかね。」

顔を晴人に近づけると、ゲームをおもしろがるようなトーンで木島が言った。

近づける顔に目を向けた晴人は、より強い眼差しで答えた。

晴人「大久保さんに理解させる事はしません。まずは、自分のやり

方で選手達にわからせます。それでも、選手達が理解できなかったら・・・・・・・・」

木島「・・・・・・・・できなかったら??」

晴人「・・・・・・・・大久保さんのやり方で、選手達に理解をさせますよ。」

それを聞いた木島は、『んっ?』といった不思議な表情を作る。そんな木島を無視して席を立つと、晴人は何もなかったように自分の仕事を始めた。

コースを使えない選手達

翌日の選手練習時間。18時30分になると同時に、狙っているのがあればの態度で現れる大久保。そして、もちろんといったわかりやすい動きで、選手が使すべきそのコースに素早く入った。

彩香「あっ…………すみません…………」

気づいた彩香がすぐに声をかけるも、無視した気づかない振りの態度で泳ぎ始めてしまう。

泳ぎ続ける大久保を見ながら、晴人の横にいる店長が小さな声でつぶやいた。

店長「くれぐれも…………問題にならないように!!」

あてつけがましいその言い方。晴人はその言葉を聞くと、すぐに集まり始めた選手達のほうに駆け寄っていった。

沙羅「水元コーチ!またあの人私達のコースで泳いでいるじゃないですか!!どーいう事ですか?」

翼「この大切な時期に…………なんであんな人にコースとられないきやならないんだ?」

選手の苛立ちもピーク。晴人はそんな選手達の苛立ちを、押さえ込むように言った。

晴人「落ち着けお前達!今は我慢するんだ…………そして、あの人

にみんなの誠意を見せるんだよ！！ぶつかり合っても何も解決しないぞ！！あの人に理解してもらえるような態度がお前達に必要なんだよ！」

晴人なりのやり方で、選手に気持ちを伝える。それでも、そのコーズを取られたという事態しか目に入らない若すぎる彼らは、強がりの態度しか示せない。

美月「伝えるも何も・・・聞く耳持たずの態度じゃないですか！私達には時間がないんです！！」

拓也「勝負の夏が迫っているんですよ！いい環境で練習できなきゃ・・・せっかく良くなってきたタイムも、これ以上速くなりませんよ・・・」

晴人「だからこそ、自分達でいい環境を勝ち取るんだよ！！あの人なら誠意を見せれば伝わる！！態度で見せるんだよ！！」

翔太「あゝ！！もうめんどくさい！！時間がもったいねーから早く1コースでも練習始めちゃおうぜ！！」

道春「そうだよ！あの人があってこんな行動、その内飽きて2・3日もすればどいてくれるはずだよ！！」

晴人が伝えたいその事は、まったく伝わっていない。それでも、その場しのぎの1コースでの練習に望んでくれた選手達にほっと肩をなでおろした。泳ぎ始める選手達を見ながら、彩香が晴人に近づく。

彩香「これじゃあ・・・毎日が不安ですね・・・」

晴人「ああ……何とかしないと……」

晴人は心の中で、ぎりぎりのやり取りを続ける選手達への不安が募り続けていた。

爆発する翔太と晴人

あくる日も、あくる日も、変わらない態度で選手のコースを奪い泳ぎ続ける大久保。それを見る度に苛立ち文句を言い合う選手達。そして、文句を言いながらも続ける1コースでの練習。そんな状況に、最初に痺れを切らしたのは、翔太ではなく女子選手達だった。

沙羅「いい加減何とかして下さい！水元コーチ！！」

華「男子選手達とすれ違う度にぶつかりそうになるんですよ？」

美月「抜いたり、抜かされたり・・・練習中、どれだけ気を使っているかわかりますか？」

舞「こんな状況じゃ、満足いく練習なんて出来ません！！」

一列に並ぶ女子選手達が、晴人を取り囲むように文句を言った。そんな辛そうな女子選手達を見た翔太は、完全に若さむき出しのけんか腰な態度で、声を震わせた。

翔太「あいつ・・・選手コースをつぶそうとしてんだ・・・
・絶対。」

翔太は泳ぐ大久保を睨みつけた。そして、その泳ぐコースに駆け寄ると、叫び散らしながらプールに飛び込んだ。

翔太「ふざけやがって！！もうゆるさね・・・！！」

壁をターンして、泳ぎ続けようとする大久保。その足を掴むと力強

くコースロープに叩きつけた。

翔太「てめえ！！いい加減にしろよ！！！」

大久保「また君か！！人が泳いでいるのに何をするんだ！！」

翔太「邪魔なんだよてめえは！！こっちは、インターハイ目指して練習してんだ！！いつまでもてめえにこのコース遣わしてられねーんだよ！！！」

大久保「まだわからないのか君は？それがスポーツマンの態度なのか？」

ヒートアップする2人の喧嘩。その間に叫び入る、コーチである晴人。

晴人「翔太ああ！！！！上がれえええ！！！！」

前回とまったく同じのこの状況。それでも晴人の態度は前回とは違い、翔太への怒りをむき出しにしていた。

翔太はプールから上がると、今度は晴人に食って掛かる。

翔太「俺達には時間がないんです！！！！コーチはこんな1コースの練習で速くなれると思ってるんですか？」

晴人「そんな態度をとっても、大久保さんは認めてくれないぞ！！」

翔太は大久保を見ると、舌打ちをするような反抗的な態度で文句を言った。

翔太「別に……あんなやつに認めてもらわなくても……」

次の瞬間。プールサイドが一瞬にして静まり返り、流れる空気が止まってしまったかのように思えた。予想もしていなかった晴人の行動に、誰もが驚き動きを止めてしまったのだ。

バン！！！！

『今の時代……子供に手をあげてしまったら首になりますよ……』そんな台詞を言っていた晴人は、その興奮する感情のままに翔太を力いっぱい叩きつけた。

彩香「みつ……水元コーチ！」

すぐに、翔太に駆け寄る彩香。

彩香「……手をあげるなんて……」

いつも味方になってくれていた彩香も、さすがにこの時だけは翔太を守るような態度をとった。

美月「コーチ……なんで翔太君を殴るんですか……」

沙羅「コーチは、私達の味方じゃないんですか？」

無表情にも感じる真顔で選手達が晴人を見た。

バラバラだった選手達を、ゆっくりでも努力と心でまとめてきた晴人。その一人ひとりが、瞬く間に大きな不自信を抱き始める。そんな一歩引いたような態度をとる選手達を見渡すと、晴人はそれにも動じずはつきりと言いつた。

晴人「初めは俺もお前達と同じだった。こっちは一生懸命目標に向かって練習をしているのに、あんな態度で邪魔をする大久保さんに苛立ったさ！でも……大久保さんに文句を言われてから、また冷静にお前達を見ているとお前達の足りない所が見えてきたんだよ！それがなんだからわかるか！！？」

誰も答えないのは分かっていた。それでも、選手達の言葉を待つように一瞬の間をおいた後、また口を開いた。

晴人「礼儀だよ！！人としての礼儀！！……なんでプールを使わせてもらっている気持ちになれない？なぜ大久保さんに態度で示せない？『速くなりたい！』『インターハイに出たい！』『全国中学校に出たい！』そんな気持ちだけが大きくなって、障害があればそれを邪魔されていると勘違いをする……邪魔をしているのはお前達なんだ！大人の人が使うプールをお前達が使わせてもらっているんだろ！！」

もう一度、選手を見渡すとその目を見ながら言った。

晴人「今日の練習はもう終わりだ……人としての礼儀がわからない君達にこのプールを使う資格はない。もし……本気でインターハイや全国中学校に出たいと思っている奴がいたら……明日、ここに来てちゃんとした礼儀と気持ちで大久保さんを納得させる！！それができなければ……俺も君達を諦めるからな。」

そのまま静かに背を向けると、スタッフルームに向かい歩いて消えていった。

心からの礼儀

晴人はスタッフルームに戻ると、誰とも話さずに黙々と事務仕事を始めた。

翌日も……誰とも口を利かずに……。そして、選手の時間が近づいてくる。いつもならもうプールサイドに降りている時間なのに、この日はスタッフルームの自分の席で腕を組み、押し黙るようにテーブルの一点を見つめていた。

プールサイドでは、いつも通りに大久保がやってきた。一瞬誰かを探すように周りを見渡す、それを終わると大きなため息をついてゴールをかけ泳ぐ準備運動を始めた。

彩香「水元コーチ!!!!!!選手が……来ました。」

プールサイドから駆け上がってきた彩香のその言葉を聞き、晴人は溜め込んでいた息を吐き、ゆっくりと立ち上がった。

大久保の後ろには、更衣室から現れた8人の男女が立っている。そのまま、その8人は大久保の前で一列に整列をする……。そして、一人の号令で機敏に揃えて深々と頭を下げた。

翔太「きおつけ!!!!!!礼!!!!!!」

一同「すいませんでした!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

地響きのようにこだまするその大きな声。数分にも感じるほど長く深々と頭を下げた後、その頭をゆっくりと起こし、翔太が今度は両

膝両手をプールサイドに付け、そのおでこもプールサイドにつけると心のこもった言葉を叫ぶように言い放った。

翔太「俺達は……小さい頃からひたむきに水泳を続けてきました！毎日毎日休まずに、友達との時間や、テレビや遊びの時間や、家族との大切な時間……そんな貴重な時間も、全て泳ぐ時間に変えて今日まで水泳を続けてきました！！」

頭を上げると、涙を溜め込んだ強い眼差しで大久保を見上げた。

翔太「最後の勝負なんです！！この夏が、俺達が続けてきた水泳の、最後の勝負なんです！！大切なコースなのはわかっています……でもどうか俺達の為に……このコースを貸して下さい！！」

また、その頭をプールサイドへぶつけるように下げると、大きな声で叫んだ。

翔太「お願いします！！！！」

大久保は無言でその選手達を見渡し睨むと、強い口調で言った。

大久保「また前のような態度をしたら……二度とこのプールを使わせないからな！！」

晴人「しませんよ！！そんな態度！！！！」

プールサイドに下りてきた晴人。選手と大久保に歩き近づくと、上目線にも感じる大きな態度で大久保に言った。

晴人「彼らが続けてきた水泳……今の彼らならその意味を、態度で示せます！」

大久保の目の前でその足を止める晴人。そして強い眼差しで大久保を見た。

大久保はそんな晴人を見ると、ため息とともに目線を晴人から翔太に移した。睨みつけるその目を見て、プールサイドに一瞬の緊張が走る。

大久保「おい！！！」

大久保の睨みつける目に、真っ向から勝負するような眼力を送る翔太。そんな翔太を見ながら大久保が優しく静かに言った。

大久保「……いい顔が出来るじゃないか……若者。」

それを伝えるとそのコースから離れ、大人が泳ぐ残りの4コースのプールに身体を沈めた。

大久保「夏の楽しみが一つ増えたな……レースの結果……必ず教えてくれよ。」

人としての礼儀。選手コースが嫌いなわけでも、コースが少ない事に文句があるわけでもなかった。大久保はその選手コースに足りない部分を見抜いていたのだ。そしてそれが兼ね備わった事を見届けた大久保は、もう文句もなく大勢が泳ぐそのフィットネスのフリーコースを、いつも通りの自己流で泳ぎ始めた。

それを見送ると晴人は、翔太に近づき熱く語った。

晴人「大久保さんに教わった、大切な熱意と礼儀だ。これから絶対その態度を忘れずに、水泳を続けような！そして必ず、いい結果を大久保さんにも知らせよう！！」

見ると翔太は涙を流し、泣きじゃくっていた。

翔太「……………せっかく譲ってもらったプールのコースです。コーチ……………何があっても、結果を出させてください！！俺達が続けて来た水泳が無駄じゃ無かったって事を、結果で教えて下さい！！」

それまでの短い人生全てをささげてきた水泳。その想いが夏にかけその言葉からしつかりと伝わってきた。

久しぶりに2コースを使い泳ぎ始めた選手。そんなプールを見渡しながら、晴人は大久保の方に目をやった。そして、横にいる彩香に独り言のようにつぶやく。

晴人「あの人は悪意だけであんな行動をしたんじゃない。俺達に、スポーツマンとしての礼儀を教えたかったんだ……………」

新しい仲間を見つけたような、不思議な気持ちになる晴人。晴人も選手達も大きく成長できた大切なトラブル、その経験を胸にまた大きな目標であるインターハイと全国中学校に向けた練習をスタートさせた。

店長と木島の悪巧み

木島「このままではまずいです！どンドン選手コースが盛り上がってきている・・・ついにあの、クレームの鬼だった大久保さんまで味方につけてしまった！これは何とかしないと・・・」

夜のスタッフルーム。暗がりの中、1つだけ照明を照らし街の街灯のような独特な雰囲気を作り出す。そんな灯りの少ないスタッフルームで、テーブルを挟み席に座り木島と店長が話し合っていた。

店長「あいつには・・・それだけの力があるって事なのか・・・競泳コーチとしての。」

晴人の力を認めてしまう、そんな表情を見せる店長。そんな店長を見た木島は、怒りの込められた歯軋りをする、身体を震わせながら机のテーブルを強く叩いた。

木島「諦めてしまっんですか店長！あの2時間2コースを使えば、どれだけの営業が出来ると思っっているんですか？選手コースがなくなるのが、このスポーツクラブの為なんです！」

邪魔な選手コース、もう一度その自分の思いを正すかのように木島が熱く語った。すると、表情を強張らせた店長が、両手をテーブルにつき、体重を支えながらゆっくりと立ち上がる。

店長「その通り！今の時代に、競泳なんていらないんだ・・・古いんだよ！！選手に熱いだけのコーチなんて古い！！！！それでは会社は成長できないんだ！！」

あまりにも熱がこもった店長の力強い言葉。それを聞いた木島が、怒られているわけでもないのに身体をビクつかせてしまった。そんな木島が少し怯えながら店長に訪ねた。

木島「店長……何か……手立てでもあるんですか？」

ゆつくりと木島を見る店長……

店長「やつもここまでは良くやってきたと思う。だが……あのいつの快進撃もこれで終わりだ……本社から、辞令が降りたよ。」

木島「えっ……？まさか……首ですか？」

店長は、静かに首を横に振った。

店長「いやいや、さすがにそれはない。まあ私たちにとっては、それに近い事だ……転勤だよ……水元の転勤が決まった。競泳のない、大人だけのスポーツクラブにな。」

ニヤツと笑った店長の表情の裏には、ただ転勤を喜ぶだけではない競泳に対する深い思いが隠されていた。

ヘッドコーチと店長

あくる日。選手の練習を終えた晴人が、気分良くスタッフルームに戻ってきた。

晴人「いやあ、今日の選手は気合いが入ってたな！！やる気が違うよやる気が！！！！こりゃ、インターハイ・全国中学校なんて言ってられないな！！日本選手権だよ！！日本選手権！！はっはっはっ！！」

いい練習も出来て大満足の晴人。その横にいる彩香も、笑顔でうれしそうな表情を見せる。

彩香「ほんとですね！！日に日に選手達の練習タイムが上がってきてる・・・・調子がいいですよ！！」

そんな笑顔の2人に目を向けると、深刻な表情をした店長が晴人を呼んだ。

店長「水元！！大切な話がある・・・・・・ちょっと来なさい。」

『やばい！！やっていなかった仕事を怒られる！！』店長の深刻な声でそんな事を思った晴人は、悪さをした後の子供のような情けない声で答えた。

晴人「あ・・・・ああ・・・・ハイ！すぐに行きます。」

2人はスタッフルームからは見えない奥の部屋、最初の対面の時に使ったあの応接室のような部屋まで移動をした。座椅子に腰をおろ

した店長が、落ち着いた表情で晴人を見上げる。

店長「ちよつと．．．その席に座りなさい。」

晴人「．．．なつ．．．なにか仕事に不備でもありましたか??」

無表情の店長に別室まで呼び出されて．．．そんな状況に
なんだか不安でいっぱいになった晴人は、座るより先にその理由を
焦りある聞き方で尋ねた。

店長「まーまー．．．とにかく座って落ち着きなさい。大切な話
があるんだよ、今日は。」

晴人が座ると、店長はその本題をストレートに話し出した。

店長「君は．．．今月いっぱいで転勤だ。」

晴人「えっ??．．．なんですか?もう一度お願いします。」

あまりに唐突なその言葉に、晴人は聞き間違いかと思い、またすぐ
に聞き直した。店長はそれでも動じず、その話を先へと進めていく。

店長「転勤先は、ここよりも更に大きい最先端のスポーツクラブだ。
うちの会社でもトップクラスの会員数をほこっている。君にも出世
のチャンスが巡ってきたって事だ。」

そんな言葉には耳も傾けず、動揺しながら自分が聞きたい事だけを
質問した。

晴人「競泳は???この選手達はどーするんですか??」

店長「ここにいる選手達の話をしているんじゃない。君の話をしているんだ。ちなみに……転勤先には子供の会員はいないので、もちろん選手コースもない。」

淡々とその晴人に置かれた状況を説明していく店長。ゆっくりと事態を飲み込んでいく晴人。

店長「いいか……。君が今いる選手達の事が気になるのは良くわかる。しかし、いつまでも選手選手、競泳競泳なんて言ってもらえないんだよ。これは、出世のチャンスだ！今いる選手達の事より、未来の自分の事を考えなさい。」

それでも、腑に落ちない表情で黙りうつむく晴人。そんな晴人を見て、店長は間違いを正すように叫んだ。

店長「まだわからないのか？君が目指しているのはヘッドコーチ！！でもうちの会社にはヘッドコーチなんて者はいないんだよ！！店長！！店長になるのが出世なんだ！！その為には、立派な競泳指導ができるよりも、売り上げを上げる事が必要なんだよ！！！」

それまで黙りうつむいていた晴人。晴人が顔を上げると、流れ落ちる大粒の涙がテーブルへとこぼれた。

晴人「自分は出世なんかしなくてもいい！！だから、ヘッドコーチを目指させてください！！！」

晴人のまっすぐすぎる気持ち。その気持ちのおかげで選手達も変わる事が出来た。一つ一つのトラブルも乗り越え、ゆっくりでも前に進んできた晴人。晴人の想う競泳には、出世にも負けない軒並みな

らぬ想いが込められていた。さすがの店長もそんな晴人の気持ち
伝わったのか、悲しい目で晴人を見つめた。それでもまた、きつい
目に切り替えると冷静さを取り戻しはつきりと言った。

店長「本社の言う事が絶対だ！転勤を断る事はできない……………
もし断るといふのなら……………」

店長が一瞬の間を置いて、その事の重大さをより感じさせる表現を
する。

店長「……………会社を辞めてもらう。」

きつぱりと言い切る店長。2人は無言で見つめあった。

今まで作り上げたものを全てぶち壊すような店長の言葉。何かに怯
える小動物のように小刻みに震える晴人。その強張らせた表情も震
えていた。その震えから、店長の言葉があまりにもきつく重いもの
だった事を感じさせた。

元気がない2人

晴人「練習を始めるぞ。気をつけ！礼！」

一同「お願いします！！」

いつも通りに練習を始める選手達。1時間がすぎた頃、トイレ休憩と練習の中間休みとも言える流して泳ぐイージーが入る。

晴人「よし……トイレ行きたいのはいけ……それ以外は100mイージー……」

ゆつくりと泳ぎ始める女子選手達。プールの間あたりに差し掛かると、美月と華が泳ぎを止め不思議そうに話を始めた。

美月「ねえ……なんか今日の水元コーチ少し元気くない？」

華「うん。私も感じる……なんだろうね。」

その横で、泳ぎとめると沙羅が言った。

沙羅「疲れてるんじゃない？別になんでもないでしょ。早く泳ごう！！」

それだけを伝えるとすぐにまた先に泳いで行ってしまった。真面目な沙羅は、自分の事で精一杯。晴人の元気のなさは、あまり気になっていないようだ。それでも気になってしまっている2人は……

華「沙羅はあー言っけど絶対変だって！！こんなの始めてだもん。」

美月「そうだよな・・・あともう1人・・・いつもと雰囲気
が違うように感じる人がいるんだけど・・・」

そう言いながら美月が見る目線の先には、プールサイドで晴人の前
に立つ翼がいた。

翼「水元コーチ。今日練習が終わったから大切な話があるんですけど・
・・・時間ありますか？」

そう言う翼の表情は、いつになく深刻だ。

晴人「ああ。大丈夫だ。・・・ここで話すか？」

それを聞くと言い辛そうに、軽く頬を押さえた。

翼「いいえ・・・フロント前でお願いします。親も・・・
一緒なんで・・・」

伝えたい事だけ伝えると、軽くお辞儀をしてすぐにプールに飛び込
み泳ぎ始めた。練習前から気にはなっていたその頬の腫れ。それほ
ど目立つものでもなかったので気にはしていなかったが、どうもそ
れが話の内容に関係があるようだ。

そんな翼を見て、転勤とはまた別の不安が頭をよぎった。『親がプ
ールの会費を払ってくれないから、自分でアルバイトをして会費を
払っている。』以前、翼ともめ事を起こした時その事実を知った。
その親と話をするという事態に、晴人は心の底から不安を感じた。

水泳より勉強

彩香「私も……一緒に行きましょうか？」

前回の道春との一件があつたので、心配になつた彩香が晴人に言つた。それに対して晴人は、「大丈夫！！」と笑顔でいつも通りを振舞つた。

フロントに行くと、もう準備万端で椅子に座っている3人がいた。翼とその両親2人だ。晴人はその前に立つと、簡単な会釈で挨拶をする。

晴人「いつもお世話になってます。翼君を担当させて頂いてます、水元晴人と言います。」

両親は言われて軽く会釈を返すと、その本題へと話を移した。

翼の父「最近翼の担当コーチが変わつたと聞いている。君がその担当コーチか……」

厳格で堅そうなイメージの父。スーツもスタイリッシュに着こなしていて、仕事も出来るといった風貌だ。その横に座る母は、それとは逆に優しそうな、温厚な顔立ちをしている。

翼の母「なんだか、すごくいいコーチだと翼から聞いています。ほんとに、いつもお世話になっています。」

深々と頭を下げる母。そんな母を横目に、父が『さてと……』といった雰囲気、話を始めた。

翼の父「一生懸命に指導してくれているのに・・・ほんとに申し訳ないが、翼の水泳を今月いっぱい辞めさせることにしました。」

晴人「えっ！！なっ・・・何をおっしゃるんですか??」

言葉がかぶさるほどの早さの晴人の反応。それを見て本望ではないという、思い殺した表情をする母。晴人はその母を見ると、すぐにまた父を見て言った。

晴人「彼らは、4人でインターハイを目指しているんです！！彼1人抜けたら、それだけで4人の今までの苦勞が水の泡になるんですよ！！」

翼の父「それは本当に申し訳ないと思っている。だが仕方がないのですよ。翼ももう受験生、翼には優秀な大学に行ってほしい。一刻一刻と勉強がライバルに遅れを取っている・・・今すぐにでも勉強に専念してもらわないと、受験戦争には勝ち残れないですから。」

冷静さをしっかりと持った、翼の父の態度と意見。今まで受けてきたクレームや数々の問題とは違い、その意志の強さと固さが見た目からも感じられた。

翼の父「私はね・・・もともと水泳には反対なのだよ。それを仕事にしている人を目の前に言うのもなんだがね・・・その事は、翼からも聞いているだろ？君も。」

うなずく晴人。

翼の父「自分で通う会費を払うからって言うから今日まではやらせ

てきた。それでも、もうそのアルバイトをする時間が惜しい時期にまで入っているのだよ。」

晴人は、目線を翼に変えて言った。

晴人「翼……翼はそれでいいのか？」

翼「……………」

何も言えない翼を見て、答えたのはその父だった。

翼の父「いいわけないだろ？曲がりなりにも、幼少の頃から一途に続けてきたスポーツだ。もちろん、家族会議でしっかり納得はしてもらったがな。」

説得力ある正当な父の意見を聞き、一瞬諦めかける晴人。それでももう一度翼を見てその思いを確認しようとした。すると、翼の赤らんだ頬の腫れが目に入る。それをみるなり晴人は強気な表情でもう一度父を見て答えた。

晴人「力ずくですか……………そんな方法で納得できているとは思えませんか？」

それにも動じず、冷静な返答をする翼の父。

翼の父「力ずくでは納得できない？君にそんな意見を言う権利があるのですかね？知っているのですよ、練習中に選手の一人を殴ってしまったらしいではないですか。殴られた本人や、その保護者が何も文句言わなくても、それを知った他の保護者からの文句で十分問題には出来ると思いますかね？」

一瞬顔色を変える晴人。それを見て、翼の母が必死で止めにかかった。

翼の母「あなた！何言ってるんですか！やめさせる変わりに、問題は起こさないって約束したじゃないですか……」

明らかに、コーチの晴人や他の選手達をかばっている母の言葉。

翼の父「ああ………わかつているさ。とにかく、そういう事なので納得していただきたい。後日改めて手続きには伺うのでそのつもりで。」

立ち上がると、軽く事務的な会釈をする。そしてそのまま、3人はスポーツクラブから出て行った。

松山への相談

スタッフルーム。そこには同時に起こったその事態に、気持ちを押しつぶされそうになる晴人がいた。自分の転勤……時間はなかったが、今では選手達から確かな信頼を勝ち取っている。少しずつだが選手達の水泳レベルもアップしてきている。ここに来て、ここまで精進してきたその選手コースを諦めなければならないのか。

翼の引退……。厳格な父。そんな父の意思の堅い意見をくつがえす事が出来るのか。整理しきれないその問題、それに対してもう自分では答えを出しきれなくなった晴人が、その場で頭を抱えこんでしまった。

彩香「今日……。松山コーチと呑みに行きましようか？」

そんな明らかにふさいだ表情で押し黙り、悩み続ける晴人を見て、彩香が優しい笑顔で微笑んだ。

夜の繁華街……。そこは松山と最初に出会った古い居酒屋。あの時と同じ3人がまたその場所でお酒をかわす。

松山「……。で？どんな相談だ？晴人。」

その初対面の時とは違い、今では、晴人にとって松山は心を通わせる良い目上の相談相手になっていた。

晴人「はい。実は……。会社から転勤を言い渡されました。」

松山「転勤??? いったいどこにだ？」

晴人「大きくて会員数も多い最新クラブ……子供の会員はいなく競泳もないスポーツクラブです。」

それを聞いた松山は、満面の笑みで答えた。

松山「ほゝそんな立派なクラブへ転勤って事は……そりゃ出世ってやつじゃないか？おめでとう！晴人！」

グラスが揺れ動くほど強くテーブルを叩くと、晴人は勢いよく立ち上がった。

晴人「出世なんかしたくないです！！自分は、競泳をやりたい！！選手指導を続けていたいんです！！」

松山は、顔をキリツとした表情に直すと、得意の強面で晴人を睨みつける。

松山「俺は競泳を選んだ！！」

きょとんとした驚きを見せる晴人。

松山「もう30年近く続けているこの仕事だ。何度となく出世の話は持ち上がったさ……。それでもその全てを蹴って、俺は競泳を選んだ！」

そんなかつこよくも見える、わが道に行く松山の熱い言葉を聞いて、晴人が素直に尊敬の言葉を漏らした。

晴人「立派だと思います！尊敬します！」

松山「……尊敬なんかするな。本当に俺の生き方が正しいと思うのか……。？給料はどんどん減っていき……。地位だって肩書きだけのヘッドコーチ。自分の時間もなくなり、それでも続ける競泳コーチ。これが職人を選んだ者の成れの果てだ……。人として成功するなら……。俺は出世の道を選んだほうが正しいと思う。」

更に強い眼力で晴人を睨みつける。

松山「晴人……。それでも競泳コーチを選ぶのか？」

晴人が松山の眼力にも負けない強い意志のある目で答える。

晴人「自分には……。それ以外の生き方が見つかりません……。・」

睨み合いの睨めっこを終えると、松山は大きなため息をついた。

松山「ふ……。どうしようもないバカだなお前は。いつの間にか、お前も職人の目をしてやがる……。ただ……。」

力のない諦めの表情を作ると、また晴人を見た。

松山「会社の規模が違いすぎる。俺とお前とはな。お前の会社で転勤を断れば、恐らく会社を辞める形をとらされるだろうな。勝ち目はない……。諦めるしかないんだよ……。競泳を！」

松山への相談という最後の望みも絶たれてしまった。転勤を断れば仕事を辞めさせられる。競泳を続けて今の職場に残る……。

そんな手段はもうないのかもしれない。その事実を受け止められない晴人は、辛い表情で目の前のグラスを飲み干した。そんな晴人を見ながらまた、思い悩んだ深い表情を作る松山がいた。

旧友、店長と松山

スタッフルームで仕事をする店長。そんな店長にフロントスタッフが遠くから声をかける。

フロントスタッフ「店長！お電話です。」

店長「ん？誰からだ？」

フロントスタッフ「はい。松山さんという方です。」

眉間にしわを寄せ、首をかしげる店長。

店長「松山？？」

とある喫茶店で、コーヒーを飲む2人。

松山「はっはっはっ！ほんと久しぶりだよな、神田！何年ぶりだ？」

松山は、店長を苗字の『神田』で呼び、話しかけた。

店長「それほど経っていないだろ？2年位か？」

松山「そうそう、そーだな。ちょうど、森下彩香を紹介してからくらいだからな。」

店長「ああ・・・さすがにお前が見込んだだけはある。森下は良くがんばってくれているぞ！！」

顔見知りの2人、というよりは旧友といえるくらいの親しみある会話だ。

松山「お前が競泳やめて……もう10年くらいになるのか？懐かしいな……あの頃。」

昔を振り返るような松山の表情。それを見た店長が、恥ずかしそうに言った。

店長「やめろよ松山！私にとって、競泳なんてもう古すぎる話だよ……」

今は一国の主のようにそのフィットネスクラブの頂点で店長を勤めている神田。彼も実は、10年前までは晴人と同じ、競泳に熱くなる水泳コーチだったのだ。

松山「しかし……あの競泳界の鬼が、こうも変わるとはな……ライバルのように2人で切磋琢磨していたあの頃が懐かしいよ。」

店長はその話を聞きながら、懐かしい顔を作りコーヒーを一口のんだ。

店長「松山は……相変わらず競泳コーチをやっているのか？」

松山「もちろんだよ……俺から競泳をとったら何もなくなる。こだわり……むきになつて続けているせいで、まったく給料も上がらず下火の生活だな……仕事を取るか、競泳を取るか、その選択を間違えたようだ……お前は立派になったな。出世を選んだお前が正解だったのだな……」

いつになく、強気さのない素直な表情の松山。

店長「そう言うな松山。俺はお前を尊敬している。出世にもこだわらず、世間の流れにもごまかされず、ただただ職人の競泳コーチをまっとうするその姿勢は、本当にまねできない生き方だよ。」

お互いを誉めあうそんな会話。本心のように本心ではない、そんな深みある2人の会話だった。そんな会話を終えると、松山はコーヒーグラス一点だけを見つめ深刻な表情に変えた。そして、数秒無言を続けると、思い立ったように口を開いた。

松山「今……お前の所で水元晴人という男が働いているだろ？
彩香の紹介で最近休みの日は、俺のところに競泳指導を習いに来ている。」

店長「……………やはりな。それぐらい気づいていたさ……………俺だって。」

わかっていたよ……………といった店長の表情。それを聞くと松山は身を乗り出すようにテーブルに肘をつく。

松山「神田、お前はやつをどう思う？」

店長は松山と真剣に見つめあうと、意を決したように答えた。

店長「正直……………今の私の立場から言わせてもらうと、競泳に熱くなる彼を必要としていない。時代が変わったのだよ……………今の私は、大人の為のスポーツクラブを作っている。競泳に熱かったあの頃のように、今は大人が通えるフィットネスクラブを作る事に

熱くなっているのだよ。」

その合わない生き方。本来なら声を張り上げて衝突してもおかしくない者同士に感じる。それでも、昔なじみの2人だからこそ、ぶつかり合う事無く、お互いを理解しあいながら話が出来た。

松山「・・・・懐かしくないか、あの目・・・・晴人はあの頃の俺達と同じ目をしているんだよ。やつは、本気だよ・・・・あの頃の俺達と同じように、本気で競泳の世界で生きようとしている。競泳を選んだ俺、仕事を選んだお前。転勤で悩む彼の為に、正しい答えを俺達が出してあげるべきなんじゃないのか？」

あれだけ、晴人の前に立ちはだかり文句を言っていた店長。その店長が驚くほど穏やかな表情でその話を聞いていた。

店長「だからこそ・・・・私は彼の転勤がチャンスだと思っている。彼の将来の為に。」

松山「俺もそう思っていたさ・・・・俺みたいな人生は、進んでほしくないとな。でも、あいつの行動や、あいつの目を見ているうちにわからなくなるんだよ・・・・思い出さないか？素直にただただ競泳コーチのトップを・・・・オリンピックコーチを目指していたあの頃の俺達を・・・・」

店長はそれを聞き、競泳時代の自分を振り返るように黙ると、答えの出せない深い表情を作った。それを思い深げに見ると、松山は腰掛けていた椅子を降りて、地べたに土下座の姿勢を作る。

松山「神田！！すまない！！昔のよしみでのお願いだ！！やつに・・・・やつに競泳の道を歩まさせてくれ！！もう一度見てみたいんだ・

・・・・競泳で生き抜く男の姿を！！俺達が届かなかった夢を、
晴人なら実現させてくれるかもしれない！！頼む！」

そんな松山を見ながら、何も言い返せない店長。その表情は、悲しみや悔しさなど色々な感情が織り交ざった複雑な表情だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7853x/>

スィム魂

2011年11月28日09時53分発行